學報
Kobe College Bulletin

ISSN0389－164X
NO. 166
2012.12.11
神戸女学院
学報委員会

岡田山キャンパスを記録に残す

理事長・院長　森　　孝一

神戸女学院が神戸の山本通にあった最初のキャンパスを現在の西宮市岡田山に移転してから、来年で80周年を迎えます。

移転80周年を迎えるにあたり、神戸女学院のキャンパスと校舎群について、これを記録に残しておくために、『神戸女学院岡田山キャンパス　建築歴史調査報告書』を、今年度末をめどに作成することにいたしました。そのために「神戸女学院岡田山学舎建築歴史調査委員会」とその作業部会を設置して、現在、報告書の作成を行っています。

来年の創立記念日（10月12日）には、「移転80周年記念シンポジウム」を計画しており、これに合わせて、講演会、展示や見学会も開催する予定です。

『報告書』のなかに、アメリカの大学のキャンパス・デザインがヴォーリズにどの程度影響を与えたのかを含めることになり、今年９月に Kobe College Corporation（KCC-JEE）の年次大会に出席する機会を利用して、いくつかのアメリカのリベラルアーツ・カレッジを訪問し、キャンパスと歴史資料を拝見し、研究者と意見交換をさせていただきました。

ロスアンジェルスのクレアモントにある Pomona College と Scripps College の建物は神戸女学院と同じ「南欧スタイル」あるいは「地中海スタイル」で、神戸女学院の校舎デザインへの影響は明らかなものと思えました。サンフランシスコ近郊にあるスタンフォード大学も同じスタイルの建物です。

これはアメリカ建築史において「スパニッシュ・リヴァイヴァル」と呼ばれた建築運動と関係があるようです。フロリダ、テキサス、カリフォルニアなど、アメリカ合衆国建国以前に、スペインの植民地であった地域において、1920年代の初めからブームになっていた建築スタイルでした。この時期はヴォーリズが神戸女学院を設計する直前にあたります。

私には一つの疑問がありました。たとえスパニッシュ・リヴァイヴァルの影響があったとはいえ、なぜヴォーリズは神戸女学院の設計において、地中海スタイルを採用したのかという問いでした。神戸女学院と同じ時期に彼が建てた同志社の「アーモスト・ハウス」はニューイングランド・スタイルの建物です。それではなぜ、神戸女学院には地中海スタイルを採用したのでしょうか。

昨年、メアリー・アンナ・ホルブルック記念館の建築に際して、私は院長としていくつかの希望を申しました。ましてやキャンパスの全面移転ですから、デフォレスト院長はキャンパス・デザインについて、自分の思いを伝えたに違いないと想像しました。しかし、デフォレストとヴォーリズの間に交わされた、キャンパス・デザインについての書簡は現存していません。

史料室にお願いして、岡田山のキャンパス・デザインについての史料を探していただきました。しか

し、ほとんど残っているものはないようです。

1929年に新キャンパス建築のための建築委員会（The College Building Committee）が設置されましたが、この委員会の議事録も今のところ見つかっていません。しかし調べていくと、いくつかの事実が明らかになってきました。

分かったことの一つは、新キャンパスのデザインについて、建築委員会内部で意見が鋭く分かれていたということです。その対立とは、キャンパスの建物を西洋スタイルにするのか、日本様式にするのか、和洋折衷にするのかをめぐるものでした。興味深いことには、建築委員会のなかのアメリカ人の委員は日本様式あるいは和洋折衷を支持し、日本人の委員は全員西洋スタイルを支持していたことでした。

最終的には地中海スタイルが採用されるのですが、その決定に大きな影響を与えたのは、デフォレスト院長の考えと、ヴォーリズの意志であったのはもちろんですが、もう一つ、決定的な影響を与えたものは、岡田山移転以前に計画されていた「大蔵谷キャンパス」のデザインであったようです。

手狭になった山本通のキャンパスの移転の最初の候補地は、明石に近い大蔵谷の丘陵地帯で、同窓会である「めぐみ会」の募金によって、キャンパスのための土地が購入されました。しかし、その後、多くの通学生にとって便利な土地で学院全体を運営するために、全学院東方移転が決議され、大蔵谷ではなく岡田山が選ばれることとなりました。

大蔵谷キャンパスの設計を任されたのは、アメリカの建築会社であった Murphy McGill & Hamlin 社でした。同社から神戸女学院に宛てられた1922年9月15日付の手紙には次のような言葉が書かれています。「私たちはイタリアやスペインに見られるような南欧スタイル（Southern European style）を採用した。これは建築予定地の景観にとくに適している。乳白色の化粧漆喰の壁、赤い瓦、屋根付き回廊のアーチは、周囲の木々の緑と魅力的にマッチするだろう。このような建物の景観の美しさは、他のいかなる建築スタイルでは得ることのできないものであろう。」同社は明石海峡と淡路島を望む大蔵谷の丘陵地帯に建てられる予定であった南欧スタイルの校舎のカラーの完成予想図も描いており、これが現在の岡田山キャンパスに引き継がれました。

デフォレスト院長がこれを強力に支持した記録も残っています。デフォレスト院長は当時 KCC 会長であった Shailer Mathews 氏に送った1929年12月23日付の手紙でつぎのように述べています。「蒸し暑い日本の気候を考えると、小さな窓の暗い人工的な

大蔵谷キャンパス完成予想図

コンディションのもとで、ずっと過ごさねばならないと考えると、病気になってしまいそうだ。できる限り多くの日光を取り入れることが必要であり、寮の寝室と常に使われる教室は南向きにすべきである。」

1930年12月、デフォレスト院長は母校である Smith College 同窓会の機関誌のために書いた原稿の中で、以上のような条件を満たす建築スタイルについて、「地中海スタイル（Mediterranean style）は私たちの目的と日本の気候によく適合している」と述べています。日本の気候条件をよく知らない KCC 理事やアメリカ人建築委員会委員の「オリエンタリズム」に対して、デフォレスト院長は実用的な視点から地中海スタイルを支持したのでした。

ヴォーリズもまた、彼自身の日本での体験と実感から、デフォレスト院長が「大蔵谷キャンパス」のときに提案された地中海スタイルを支持したことに賛同しました。その判断の視点は、デフォレスト院長と同様に実用的なものでした。建築完成後に彼が『めぐみ』誌のために書いた「設計者の言葉」において、「すべての建物は屋根の付いた回廊によって結ばれている。…雨の多い日本のような国においては、屋根付きの回廊は非常に実用的である。…寮は中心にパティオを持った菱形の建物。…すべての部屋はほぼ全てが南向きで、最大限に日光を取り入れることができる」と述べています。

岡田山キャンパスの設計の経緯について、調査したことの一端を紹介させていただきました。デフォレストとヴォーリズという日本を知り尽くした二人のアメリカ人の存在、そして二人のキリスト教信仰に根ざした教育への情熱が、神戸女学院の誇りであり財産である岡田山キャンパスを生み出したことに、改めて感謝したいと思います。

神戸女学院家庭会報告

個人情報保護のため、一部削除しています。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

春季公開講座報告

2012年の春季公開講座は「笑い」をテーマに３人の先生方にご講演いただきました。第１回（６月16日）は、総合文化学科の岩田泰夫教授に「笑う―外に出す・言葉にする・体験に基づく知識―」という題名でお話いただきました。特に岩田先生ご自身の福祉や障害者の人々との体験に基づいてのお話でした。第２回（６月23日）は、総合文化学科の大橋完太郎専任講師に「笑いの思想・笑いの文学」というテーマでお話いただきました。哲学的な笑いの説明や、笑ってはいけなかったヨーロッパ中世からルネサンスの「開かれた笑い」への変遷について、そして、聖書における笑いについても詳しく講義をしていただきました。そして、第３回（６月30日）は心理・行動科学科の小林知博准教授に「笑いと健康―心理学の研究から―」についてご講義いただきました。小林先生のご専門である心理学の数々の実験の結果を通して、健康的な人生への３つの秘訣について、何が健康感または幸福感をあげるかについてお話いただきました。３人の先生方のお陰で、３つの全く違った、そしてとても広範囲の「笑い」をカバーする大変関心深い春季公開講座となりました。

前年度は、講座の１回を西宮北口のプレラホールでさせていただいたのですが、今年は３回とも岡田山で実施されました。今回初の試みの駅貼りの交通広告の効果があったようで、受講者数も大変多く、第１回125名、第２回175名、第３回200名の合計500名の方々が参加されました。

この「笑い」というテーマは生涯教育委員会で決まったものです。東日本大震災や原発事故と大規模な災害で被災された方々に笑いを取り戻していただきたい、という願いを込めて選ばせていただきました。生涯教育委員会は中高大から委員が集まっており、公開講座は神戸女学院（中高大）と地域の皆様、また在学生と卒業生が時間を共にできる大変貴重な場面です。前年度より若い学生たちの参加を集めたいと思っておりましたが、今年度もこれが課題として残りました。来年度も皆様の興味と関心の湧くテーマと講義を計画できますよう、生涯教育委員会全員で努力していきたいと思っております。

（生涯教育委員長）

学院リトリート報告

今年も学院リトリートを７月27日(金)に行ないました。学院リトリートとは、学院全体でキリスト教主義と建学の精神について学ぶことを目的としています。なかなか落ち着いて考えることが難しい中、日常の業務から少し離れ、キリスト教を軸に、いろいろな視点から私たちの働きの場について考えることができればと願って設けられたプログラムです。

今年は『神戸女学院の宣教師―建物の名称を追って―』と題し、学内の３名の講師にお話しいただきました。宣教師として来られ、本学にとって欠かせない存在となられた先生方について、改めてその功績と志しについて考えるひと時となりました。お忙しい中、発題をお引き受けくださいました３名に、心より感謝申し上げます。

７回目をむかえました学院リトリートですが、学内者による複数の発題は、出席者の皆様に好評で、学院について学ぶ良い機会となりましたと感想をいただきました。実りの多いひと時を過ごせましたことに心から感謝し、散会いたしました。

日　時　　2012年７月27日(金)　14:00～16:00
場　所　　メアリー・アンナ・ホルブルック記念館　301号室
参加者　　128名　　発　題　　飯　　謙
発　題　　『神戸女学院の宣教師―建物の名称を追って―』
・Angie CREW 先生　　中高部英語科教諭
・Emily Maria BROWN 先生　史料室　佐伯裕加恵
・Mary Anna HOLBROOK 先生
チャプレン・総合文化学科准教授　中野　敬一
(チャプレン室)

2012年度宗教強調週間

「キリストに根を下ろして造り上げられ、
教えられたとおりの信仰をしっかり守って、
あふれるばかりに感謝しなさい。」
（コロサイの信徒への手紙 2:7）

プログラム

〈11月５日～11月９日〉

11月５日（月）
早天祈祷会　音楽学部 音楽学科 ３年生
中高部礼拝　学長・学院チャプレン　飯　謙
チャペルアワー　飯　謙

11月６日（火）
早天祈祷会　中学部 ３年生
中高部礼拝「選ばれた宝」
同志社大学名誉教授、
日本基督教団賀茂教会牧師　野本　真也
チャペルアワー「愛に生きるために」野本　真也
全教職員礼拝「手で触れたもの」　野本　真也

11月７日（水）
早天祈祷会　文学部 英文学科 ２年生
中高部礼拝「友達だとしたら」
白浜バプテストキリスト教会牧師、
NPO 白浜レスキューネットワーク代表　藤藪　庸一
チャペルアワー「良心を働かせて下さい」
藤藪　庸一
中高部 PTA のための宗教講話
「教育が人を大人にする」　藤藪　庸一
学生寮　夕拝「この女のしたこと」
日本基督教団神戸イエス団教会牧師　上内　鏡子

11月８日（木）
早天祈祷会　高等学部 ３年生
中高部礼拝「しあわせな人」
医療法人隆玄山浦医院理事長　山浦　玄嗣
チャペルアワー「神さまの思い」　山浦　玄嗣
同窓生のための宗教講話
「八つのしあわせ」　山浦　玄嗣

11月９日（金）
早天祈祷会　文学部 総合文化学科 ４年生
中高部礼拝　音楽礼拝
ゴスペルディレクター・シンガー・ピアニスト、
「ゴスペルミニストリー S.C.A」代表　山本真一郎
アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」
大学院音楽研究科生１年

＜大学チャペルアワー＞

例年より少し暖かい11月初旬、今年度は宗教強調週間講師として同志社大学名誉教授であり、また学校法人同志社理事長、キリスト教学校教育同盟理事長を歴任され、現在日本基督教団賀茂教会牧師の野本真也氏、NPO 白浜レスキューネットワーク代表として自殺防止のために日夜活動をされておられる白浜バプテストキリスト教会牧師の藤藪庸一氏、岩手県大船渡市にて医師として働きつつ、地元ケセン語の体系化を進め、聖書をケセン語に訳し、与えられた場における御言葉、伝道について追及をしておられる山浦玄嗣氏をお迎えしました。

６日（火）は野本真也先生に「愛に生きるために」と題して、ヨハネの手紙（一）4:7-12を通して、愛の真理についてお話しされました。私たちは現実の苦しみや矛盾に目を奪われてしまい、その裏にあるプラスの意味が見いだせないときが往々にしてあります。そこには隠れた愛があり、神さまが徹底的に私たちを愛してくださっているという事実が根底にあります。人が神の愛に気づくかどうかは、「神に許された者として誰かを許す」この小さな次元の繰り返しによって、神の愛の次元に導かれていくのです。学院標語の「愛神愛隣」を大切にして、歩みを続けてほしいとお話しされました。

７日（水）は藤藪庸一先生がご担当くださいました。藤藪先生は、現在白浜の三段壁にて自殺防止の活動をされておられます。先生は、行く場所もない途方に暮れている方を家に連れて帰り、共に生活し、その人が自立できるようにと活動をされておられます。良きサマリア人のお話を語られ、信仰や志が問われるのはなく、向き合った時に「良心」が問われる瞬間があり、その時自分ができる範囲の助けを行う、そのちょっとした行動が人を救う結果となるのですと語られました。イエス様が「あなたも同

じようにしなさい」と語られたように、私たちは良心が働く瞬間、助けを差し伸べる人であるように努めていきたいと思います、とお話しくださいました。

8日(木)は山浦玄嗣氏にお話しいただきました。先生は大船渡市で被災した状況をお話しいただき、津波が来たときの状況や、生き残った人々の様子、その中での医療活動などお話しくださいました。

またケセン語に対する意識や聖書の御言葉を伝えることへの思いをお話しされ、ケセン語に訳されたヨハネによる福音書1:1-18を読まれました。どんな現実があろうとも、目を開けてよく見ることで自分が為すべきことが見えます。そこに神さまの言葉があり、我々を呼んでいる光がそこから見えてくるはずだと力強く語られました。

6日の全教職員礼拝では、野本真也先生に慰めと励ましのメッセージをいただきました。また続けて永年在職者表彰式が行われ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時を持つことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者でまもることができ、とても嬉しく思います。

遠方からお越しくださり、一日に何度も講演してくださった講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャプレン室)

＜中高部礼拝＞

宗教強調週間の一日は、早天祈祷会から始まります。中高部からは、中学部3年生の生徒（6日）と高等学部3年生の生徒（8日）が奨励を担当し、貴い証しに導かれながら生徒・教職員の有志による祈祷が献げられました。友のために、また病の内にいる者のために、隣人を執り成す祈りが次々と捧げられて、恵み豊かな時となりました。

早天祈祷会に続き、講堂にて中高部礼拝の時がまもられました。5日は飯 謙学院チャプレンから「役に立たないと思えるものを生かして用いる神様のまなざし」を身に着けて、神戸女学院生としての自分のあるべき姿を考えることの大切さを、お話していただきました。

6日は野本真也氏から「選ばれた宝」と題して奨励をしていただきました。神様からすれば、取るに足りない小さく弱い存在である私たちを、神様はじっと見つめて愛してくださる。そのことを心に留めながら、私たちもまた、本当に大切なものを大切にしていく歩みを求めたいとの思いを確認する時となりました。

7日は藤藪庸一氏から「友達だとしたら」と題して、「隣にいる人のために自分にできることを始めてみませんか」との励ましをいただきました。

8日(木)は山浦玄嗣氏から、「しあわせな人」と題して奨励をしていただきました。聖書のケセン語の翻訳で知られる山浦先生から、聖書の奥深い意味を分かりやすく説明していただきました。

9日は、山本真一郎氏を講師としてお招きして、音楽礼拝の時をまもりました。人と比べる生き方ではなく、神様にまなざしを向けながら生きることの大切さをお話いただき、“You Raise Me Up”などの賛美を通して、神様にまなざしを向ける時となりました。

また、中高部では、宗教強調週間放課後プログラムとして、生徒たちの学びと交わりを深めました。5日は森 孝一院長、7日は藤藪庸一氏をお招きし、中高部生徒のフリーディスカッションの時をもちました。また、8日には、夏の修養会（広島訪問、長島訪問）の参加生徒を中心とした合同報告・学習会が行われ、9日には前田直子氏(学院オルガニスト)にパイプオルガンの講習をしていただきました。

この一週間は、様々な礼拝と多くの祈りが捧げられました。神戸女学院に連なる者が、愛神愛隣に根づく歩みを今一度確認することのできた恵みの時となったように思います。

(聖書科)

KCCだより

［コーベ・カレッジ・コーポレーション（KCC）は、1920年の創立以来、絶えず海の向こうから神戸女学院の学びを支えてくださっている、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です。この岡田山の美しいキャンパス造営に対する多大な貢献をはじめとして、その活動が神戸女学院にもたらしている恩恵は実に多岐に亘っています。2004年、KCC は21世紀におけるその活動方針を明確にするため、名前の後にジャパン・エデュケーション・エクスチェンジという副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今年９月、会長に就任された Mr. Sugiura が今回の KCC だよりを執筆くださいました。］

「御挨拶」

KCC-JEE 会長　杉浦　　剛

KCC-JEE（Kobe College Corporation-Japan Education Exchange）と云う団体のことを詳しく御存知の方は余り多くないのでは、と思います。1920年、当地 Chicago 近辺の篤志家数人が寄金を募り神戸女学院の校舎を発祥の地、神戸から現在の西宮市岡田山に移転するに際しての資金面での支援をされたのが始まりです。以来100年近く多くの方々が神戸女学院発展の為の物心両面に亘る支援を続けてきました。

私自身、当団体に関与し始めて以来数年になりますが、この度９月の総会でどのような理由か存じませんが会長職に任命されることとなりました。大変な重責を負うこととなりました。家内を始め母親、祖母など家族、親戚の中に神戸女学院の卒業生が多くおり、今回の任命も或いは自然な成り行きであったのかも知れぬと認じています。

KCC-JEE と神戸女学院との関係の歴史を学ぶにつけ、歴史の中での僅か半ページか１ページにも満たない短期間ですが、其の間にどの様な支援をさせていただけるかが私個人として、又団体としての第一の関心事であります。現在は中高部の英語教員、Gottschalk Teachers ４人の派遣、その費用の一部の負担、各年の大学教授の選考、派遣、毎年の夏季 Internship Program に応募される学生さんの当地でのお世話などが主な活動内容です。

院長の森先生と時折お話をさせていただく度に、先生の抱かれる神戸女学院のすばらしい将来像、理想像を伺います。その夢や理想像実現の為に我々がどの様な応援をさせていただくのが一番なのか、日夜考えております。財政の必ずしも潤沢ではない現状から尚更大きな挑戦と受け止めております。

お世話をする我々 KCC-JEE の全員にとって一番嬉しいことは、これらのプログラムのお陰で皆様の将来に向けての成長に少しでもお役に立てたことを学ぶ時です。先日も中高部の生徒さんから米人教師より英語を習ったお陰で英語に対する興味が深まり、勉学に一層励む契機になったとのお便りがありました。

毎年夏に何人かの学生さんが Internship Program で当地に来られますが、来られた時と１ヶ月後見違えるように自信に満ちて帰国される姿を見るにつけ、少しはお役にたてたのかな、と喜ぶことがあります。

その他、姉妹校である Rockford College に留学される学生さんなど、神戸女学院の学生さんにお目に掛かる機会がよくあります。すばらしい人柄と希望に満ちた若い皆様の姿を見るにつけて家内共々強い印象を与えられます。そのような学生さんを含めた皆様方すべての方々の人生の中で神戸女学院で過ごされる数年間が如何に重要かを痛感させられます。

それを念頭において、我々の差し上げる支援が取るに足らない微小なものかも知れませんが、少しでも良き学び舎とするためにお役に立てれば、というのが我々の日々の祈りであります。

終盤に近づいた米国大統領選挙も接戦の様相を呈していますが、その中で幾つかの決定的要因として女性票の動向が其の一つに挙げられています。米国社会での女性の影響力の大きいことを示す一証拠でしょう。

日本でも僅かな程度の差はあるかも知れませんが同じような状況だと思います。そのような社会の中で女性教育に専念される神戸女学院の任務は重大だと信じます。学院の益々のご発展を祈ると共に、皆様方の神戸女学院での数年間の学生生活が実りの多いものであることを念じて止みません。

史料室の窓(29)

学校アーカイヴズの役割

神戸女学院史料室

以前、学報に「学校アーカイヴズとは」という文章を書いたことがあります（2009年12月15日発行第157号）。2009年７月１日の「公文書等の管理に関する法律」（公文書管理法）の公布を受けて、学校アーカイヴズの活動の最近の動向について報告したものでした。そのときにはアーカイヴズがいかなる組織であり、どのような資料を収集するところなのかといった議論を紹介しました。

あれから３年、公文書管理法が施行されて、文書館が各地に作られるようになりました。国公立大学は法律に基づいて文書館を設置し、大学史活動を展開しています。私立学校もまた、周年事業のためだけではない資料の活用を目指して、それぞれに模索を続けています。

学校をとりまく環境は刻々と変化し、教育基本法や大学基準協会における学校の必要要件の中にも質の保証という観点から「資料」についての考え方が加えられるようになり、少しずつではありますが、学校の持つ資料の大切さが認識されるようになってきたといえます。現在、大学に求められているのは、教育・研究を行なう機関であると共に、生涯学習や社会連携などを通して社会に貢献することです。そして先述した公文書管理法によって大学の持つ資料は国民共有の歴史資料と位置づけられます。

ところで、大学の社会貢献と大学アーカイヴズの社会貢献とはイコールといえるのでしょうか。かつて、大学アーカイヴズが資料を活用するようになってきた頃、情報提供だけでなく、展示を行なうなど積極的に外に向っていくことを「大学史活動」と位置づけ、これからはこうした活動が重要になってくるといっていた人がいました。そして「大学史活動」は広い意味で社会貢献であると考えていました。今のアーカイヴズを取り巻く状況はその人のいっていた通りになってきているといえるかもしれません。アーカイヴズの活動は収集・保存から公開へと広がり、いまや「社会貢献」という新しいキーワードが加わったのです。

大学アーカイヴズは、大学という組織の運営の記録を有形の資料とそれに関わる無形の情報として蓄積している場所です。一組織の記録に過ぎないといってしまえばそれまでですが、学校はそれを取り巻く地域社会と密接に関わっています。アーカイヴズが収集・保存している資料は組織の存在意義を確認し、足元を保証するものとなります。そして、学生たちにとっては、自分の位置を確認してもらうために学校が行なう自校（史）教育の材料ともなり得ます。つまり、組織の存続理由だけでなく、学校の本来業務である教育・研究にとっても意味があります。社会や学校業務に密接に関わっている、これが学校のアイデンティティにつながるからです。

アーカイヴズには収集・保存というインプットと公開・展示といったアウトプットの２つの活動があります。このバランスは学校ごとに違っていますし、アウトプットは本来業務ではないと考える人もあります。しかし資料を可視化することは今の時代、学校の広報戦略とも結び付いていて、社会やメディアとうまく付き合っていくことが求められていることも事実です。学校の発信したい情報をうまく伝えるために、アーカイヴズは広報という窓口を通して、有効な仲介者として関わりをもてるのではないでしょうか。ある大学では、資料のレファレンスの際、必ず依頼者と面談を行なうそうです。依頼の内容を具体的に探り、必要な資料を見つけていく。これはアーカイヴズという小回りのきく機関ならでは、アーキヴィストという資料担当の専門職ならではの仕事であると、担当者は語っていました。こうした活動を行なうためには、広報や総務といった事務系の他部署との連携が欠かせません。資料は活用されてこそ存在意義があります。アーカイヴズはそのために存在意義を示すことが社会貢献につながるのではないでしょうか。

難しいことはさておき、問い合わせに対して資料を提供できて、利用者に喜んでいただける、このほんのちょっとした事でも、私にとっては社会貢献に思えるのですが……。

『蒲団』の岡田美知代と『或る女』の佐々城信子

― 神戸女学院での出会い ―

田山花袋の『蒲団』という作品をご存知でしょうか。日本近代文学史では自然主義の代表作として知られる小説ですが、思い出してもらいたいのは、主人公竹中時雄が夢中になる女弟子芳子のモデル、神戸女学院出身の岡田美知代のことです。「美しいこと、理想を養うこと、虚栄心の高いこと――こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた」と描かれる芳子は、文学を理解し理想を語り合うことのできる、それまでの女性にはない複雑な表情を目にたたえた〈新しい女〉として登場します。田山花袋が岡田美知代に出会わなければ、『蒲団』が書かれることはなかったでしょう。日本の自然主義文学の展開も、違ったものになったかもしれません。山内祥史先生がお書きになった「花袋「蒲団」の背景と神戸女学院」(『神戸女学院大学百年史　各論』、1981年３月）には、岡田美知代の神戸女学院時代や『蒲団』の背景などが詳しくまとめられています。私は日本近代文学の研究者として、神戸女学院が岡田美知代の育った場であるということを誇らしく思ってきました。

さて、ここまでは広く知られていることですが、このほど新しい事実が発見されました。岡田美知代はこの神戸女学院で、驚くべきことに佐々城信子に出会っていたのです。佐々城信子は、国木田独歩の最初の妻で、有島武郎の『或る女』の主人公葉子のモデルとなった女性です。これまた日本近代文学史に名を残すもう一人の〈新しい女〉が、岡田美知代と神戸女学院で机を並べていたとは！

この発見の機会をくださったのは、広島大学の有元伸子先生です。有元先生は、広島の女性作家として岡田美知代に注目され（美知代は現在の広島県府中市上下町の出身)、研究を進めるなかで未発表原稿「国木田独歩のおのぶさん」を活字化されました(『内海文化研究紀要』第40号、2012年３月)。題名通り佐々城信子を語る小説で、「おのぶさん――私が初めて、あなたを知ったのは、まだほんの、神戸女学院に入ったばかりの、一年坊主の少女の時でした」という具合に、神戸女学院で信子に出会ったと書かれています。信子の「独特な美しさ」、独歩と別れた信子が隠れるようにして神戸女学院へ来たという事情、さらには信子が神戸女学院から出奔したということ、噂でもちきりの学生たちの様子など、さまざまな神戸女学院でのエピソードが連ねられています。しかし、佐々城信子が神戸女学院に在籍したということは、これまで知られていませんでした。活字化にあたって有元先生から私の元にそうした事実があるのかどうか問い合わせがあったとき、美知代が信子との出会いを書き残しているということにまず驚き、それでもおそらく虚構なのだろうと思いました。ですから、大学史料室で確認してもらった当時の名簿に「佐々城信」の名があることが分かったときの私の興奮は相当なものでした。信子は美知代と同期、明治31年９月に入学し、同年12月に退学していました。在籍はわずか三ヶ月ですが、確かに二人は神戸女学院で出会っていたのです。有元先生の検証によれば、信子の妊娠と出産や子どもにまつわる部分など、事実と明らかに異なるところもあるようです。作品の執筆時期は、美知代が70代となっていた昭和33年と推測されています。有元先生は、美知代自身の経験が重ねられたのではないかと論じられています。事実との相違が故意のものなのかどうかは分かりませんが、同時代に小説のモデルとされ、〈新しい女〉として文学史に姿を刻み込まれるという希有な人生を生きた女性として、美知代は信子に近い気持ちを抱いて執筆したに違いありません。二人の出会いからすでに百年の時間が流れていますが、当時のことをお聞きになっている方はいらっしゃらないでしょうか。小さなことでも構いません。もしご存知のことがあれば、ぜひともお知らせください。

岡田美知代

佐々城信子

（総合文化学科教授　飯田 祐子）

＜留学報告＞

留学報告

三杉　圭子

2011年秋から１年、アメリカのコロンビア大学に留学させていただきました。私の専門は米文学で、今回は主に20世紀前半に活躍したジョン・ドス・パソスという小説家の研究をして参りました。大学図書館には充実した蔵書とオンラインサービスがあり、本当にありがたい環境でした。何か思いつけばすぐに出向いて文献を手に取ることができ、図書館の契約データベースには、24時間学外からアクセスが可能でした。秋・春・夏、それぞれの学期に関連授業の聴講をしましたが、教壇の反対側に座るのは学生時代以来のことでした。予習をして教室に足を運び、講義や討論に耳を傾ける―そこでは、テキストを囲んで皆が文学について考え、語り合う―とても幸せな贅沢な時間でした。先生方には授業の内外でいろいろな示唆を与えていただきました。

大学での講演会はもちろん、オフキャンパスで作家や評論家の生の声を聞く機会も多々ありました。普段活字でしかしらない作家たちの素顔を垣間見るのは楽しいことで、作品のエンディングの種明かしを書き手に尋ねる機会にも恵まれました。

ニューヨークの街は昨秋、同時多発テロから10周年を迎え、経済格差を糾弾するウォール街占拠運動が繰り広げられるなど喧しいことでしたが、キャンパスはある種の聖域でした。そんな中にしばし身を置き、有意義な時間を過ごすことができました。この場を借りて感謝申し上げます。

（総合文化学科教授）

2011年９月11日、コロンビア大学

学問の故郷へ再留学

栗栖　和孝

2011年９月１日から2012年８月31日の一年間、海外留学の機会を与えていただき、カリフォルニア大学サンタクルーズ校言語学科で研究をして参りました。太平洋に面した小さな街にあるこの大学は、11年半前に私がPh. D. を取得した母校であり、学問の故郷です。当時は独身でしたが、今回は妻子を連れて故郷に帰ることができ、嬉しく思います。

論文を書く傍ら、大学院の授業や勉強会にも出席しました。教員や大学院生と深い議論を交わし、研究内容自体に関する収穫はもちろん、学問に対する姿勢に関しても多くの刺激を受けました。留学前に予定していた主要研究テーマに加え、十年以上考え続けながら本格的に取り組む時間の取れなかったテーマにも取り組むことができ、有意義な研究生活を送ることができました。

研究の合間に家族で旅行に行ったことも良い思い出です。特にヨセミテ国立公園では、日本で体験できないスケールの大自然を満喫しました。ハイキングしながら、広大な山々に横たわる原生林、滝、岩盤、湖などを堪能する時間は至福の一時でした。その他にもワイナリーを巡るなど、多くの場所を訪れたことは家族全員にとって大きな収穫でした。

予定していた全研究は達成できませんでしたが、公私共に多くの事を実現させることができました。研究面および私生活の双方において、充実した時間を過ごさせていただき、心より感謝申し上げます。

（英文学科准教授）

2012年８月20日　ヨセミテ国立公園にて

Women's Education Worldwide Conference 2012報告

今年度の「世界女子教育連盟」総会は６月８日から10日まで、中国南京市のジンリン女子大で開催された。WEWC は、女性の大学教育の優れた担い手である女子大学が、国際的にも地域的にもリーダーとなりうる女性の育成を目指して互いに研究発展させた教育プログラムや教育方法について、情報や経験、意見を分ち合い、世界規模での連携、交流を実現、その存在意義を相互に高めてゆくことを共通の目的とした女子大学の同盟である。

今回参加した大学は、全体で33校、延べ100人が各国から集まった。スミス、マウントホリヨーク、ウェルズリー等の合衆国の名門女子大のほか、近年の国力の著しい伸張とともに女性教育を発展させてきたオーストラリア、イタリア、日本、韓国、中国の女子大が中核的メンバーとして参加した。また最近、女性大学を設立したが、未だ続く地域での厳しい女性差別、圧制のゆえに女性の高等教育の充実を喫緊の課題と急ぐサウジアラビア、アラブ首長国連邦のドバイ、ペルー、インド、アフリカのジンバブエなど、発展途上の各国地域からも熱心な参加があった。

朝８時半から丸一日、寸暇を惜しむように、相互に共通する問題である女性の能力開発教育や、国際的視野を持った女性のリーダーシップ養成プログラムの内容や方法、地域ごとの問題や取り組みなどの紹介や意見交換が行われ、ともに掲げる女性教育の目標実現を目指す各大学の熱意に大いに啓発された３日間であった。

（英文学科教授　溝口 薫）

WEWC―ウェルカムパーティーにて

Kobe College International Students Houseの開設

今年９月24日まだ残暑のきびしいなかでしたが、森 孝一理事長・院長をはじめ学院の関係者が参加して、飯 謙チャプレンの司式により Kobe College International Students House（略称：International House）の開設式が現地にて執り行われました。この施設は、今年４月に岡田山キャンパスの南側に隣接する住宅を購入し、その後約半年をかけて建物の改築工事や什器・備品の設置など必要な準備が整えられて、留学生寮として生まれ変わったものです。また、これらの整備と並行して文部科学省に、大学の校地・校舎として利用するための申請を行い、2012年５月には教育施設として認められました。施設の概要としては、敷地面積661.00m^2、木造２階建、延床面積194.90m^2、集会室や応接室も備えて収容定員は６名となっております。場所は本学院の正門に向かって左側道路奥に位置し、通学や日常生活にも最適な環境です。大学院人間科学研究科では、文部科学省の科学技術振興調整費の助成を受けて2009年度から「地域から ESD を推進する女性環境リーダー」プログラムを実施しており、このなかでアジア・アフリカから留学生の受け入れを行っています。インターナショナルハウスは、当面このプログラムによる留学生の寮として使用することとし利用規程も整備して、早速５名の留学生が順調に生活を始めています。今後、本学院の国際交流に大きく貢献する施設として期待されています。

（総務部長）

International House

人　事

慶　弔

記念賞

個人情報保護のため、一部削除しています。

栄　誉

永年在職者表彰

新刊一覧

高橋雅人（総合文化学科教授） 他著
『フィロカリアⅧ』 （新世社）
『アブラハムのイサク献供物語：
アケダー・アンソロジー』
（日本基督教団出版局）

河西秀哉（総合文化学科専任講師） 他著
『皇室百年事件録』 （新人物往来社）

真栄平房昭（総合文化学科教授） 他著
『琉球弧―海洋をめぐるモノ、人、文化―』
（岩田書院）

石川康宏（総合文化学科教授） 他著
『「ナヌムの家」にくらし、学んで』
（日本機関紙出版センター）

河西秀哉（総合文化学科専任講師） 他著
『孤獨の人』 （岩波書店）

岩田泰夫（総合文化学科教授） 他著
『チャレンジ現代社会と福祉』 （法律文化社）

高橋雅人（総合文化学科教授） 他著
『高校倫理からの哲学１ 生きるとは』
『高校倫理からの哲学 別巻 災害に向きあう』
（岩波書店）

＜オフィスの宝物＞

学生生活支援センターの宝物はやはり…！

この原稿は10月25日（木）の午後に書いています。明日から２日間の予定で恒例の岡田山祭（大学祭）が開催されます。今、大学祭実行委員会の学生さん、模擬店出店やクラブ等の作品展示を企画する学生さんたちが汗を流し準備に大忙しです。下の写真はその準備風景です。

毎年恒例の風景ですが、学生生活支援センターでは、学生さん主体の学校行事に自ら積極的に参加し、活動している姿を楽しく、温かく見守っています。学生生活支援センターの宝物はやはりそのような学生さんたち、また彼女たちの諸活動を通して成長していく姿をおいて他にはないでしょう。筆者自身、６年ぶりに学生生活支援センターに戻り、久しぶりにその歓びを実感しています。

学生生活支援センターの業務内容は多岐にわたり、毎日時間に追われていますが、文字通り学生さんたちへの支援業務です。奨学金関連業務、学籍関連業務、授業出席状況等の学生生活における各種調査の実施、学生相談などなど。どの部署においても、学生さん第一に業務を遂行されていると思いますが、学生生活支援センターへの業務応援も学生さん支援となりますので今後ともよろしくお願いします。

（学生生活支援センター課長）

岡田山祭準備風景

思いをのせた１枚

手に取るとすこし重みを感じるSPレコード。今では音声や画像など様々な情報が電子化され、簡単に残せる時代になっているが、このSPレコードにも思いが残されている。

1935年６月15日に製作されたそのSPレコードには、「或ル日の感想」「BIBLE READING」というタイトルが表裏それぞれに印刷されていて、プレーヤーにかけると優しくも、しかししっかりとした意思を感じさせる女性の声が流れ出す。声の主はデフォレスト院長。５分半に込められた思いが、77年の時を超えて聞こえてくる。

デフォレスト先生はその短いメッセージ（日本語）の中で、使命を果たすために後継者を育てることの大切さ、またそのために自分たちが尽くさなければならないこと、苦心失望があろうけれども、この多大な仕事をになっていく使命は人間の力ではなく、神様の与え給う能力によって果たすものであることを語っておられる。

私たちは後継者として、神戸女学院の今をしっかり守っているか、次の後継者をしっかりと育てているか、常に祈っているか。そう問われた気がした。

先輩の思いを後世に伝え残していくこと、今の神戸女学院を未来に伝えていくこと、そのために今自分ができることを考え歩んでいきたい。祈りにも聞こえる朗読（英語）された聖書の個所をひもとき、さらにその思いを強くさせられた。

※視聴覚センターでは、レコードを保存するために音声をCDにダビングして保管しています。お聞きになりたい方はお訪ねください。

（図書館　視聴覚センター）

オリジナルSPレコード

大学報告

３年目を迎える「地域からESDを推進する女性環境リーダー」

６月15日に、学内のみならず一般にも公開された形で「ESDプログラム」の報告会が行われました。留学生たちは2011年10月の来日以降、本プログラムのカリキュラムで学び理解したことについて、各々の専門分野に関連づけながらわかりやすく丁寧に報告を行いました。また９月７日には、「ESD Program Final Presentation Meeting, 2012」と題した学内外の関係者向けの修了報告会を実施しました。各人の専門分野に基づいて本プログラムから学び得たこと、ならびに残された課題や帰国後の展望についての報告とディスカッションを行いました。

中国、韓国、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ベトナムの６ヶ国より６名の留学生を迎えてはじまったプログラム２年目でしたが、１年間にわたる本学でのカリキュラムを終え、９月18日にはソールチャペルにて無事に修了式を執り行うことができました。

そして第２期生と入れ替わりに、10月からは第３期生の５名（中国、インドネシア、フィリピン、ベトナムの４ヶ国）を迎えることができました。実施に際しては前年度までの経験も踏まえて、より充実したプログラムになるよう、万全の体制を整えて臨むつもりです。多くの団体、先生方、個人のご支援を賜って成り立っているプログラムであることを実感しております。お礼を申し上げるとともに、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（人間科学研究科特任助教　武中 桂）

報告会

修了式

シンポジウム「ジョブズの世界を訳す」

７月15日、大学院文学研究科「通訳・翻訳コース」が来年度に開設10周年を迎えるのを記念し、プレイベント「ジョブズの世界を訳す」が講堂で開催された。

iPhone や iPad で世界を席巻したアップル創業者スティーブ・ジョブズの公式伝記は日本でもベストセラーとなったが、その訳者・井口耕二氏（同コース非常勤講師）による基調講演では、井口氏が通常の３～４倍で行った翻訳作業の苦心を披露。当初から無理なスケジュールだったのが、執筆の遅れ、さらにはジョブズの突然の死など、考えられない事態で超過密スケジュールに変わっていくさまがまるでサスペンス小説のようで、聞いているほうが心臓がどきどきした。また電子基板の色分けの訳しかたなど、工学部出身の井口氏ならではの専門性の高さを示す実例のほか、ジョブズが食べたすしが「穴子」だったのか「うなぎ」だったのか、東京の高級ホテルに問い合わせたエピソードなど、事実を徹底的に検証するプロの姿勢が伝わってきた。

基調講演後、井口氏、熱烈なジョブズ・ファンであるアイティメディア㈱の松尾公也氏と本学大学院通訳・翻訳コースの中村昌弘准教授、そして司会・田辺によるシンポジウムも行われ、炎天下、お集まりくださった観客とともにジョブズや翻訳への思いを分かち合った。

（英文学科准教授　田辺 希久子）

井口氏による基調講演

西宮市主催のイベント「メダカの学校」に参加して

去る７月21日に、西宮市主催の「メダカの学校」が環境学習サポートセンターで開催され、本学より環境・バイオサイエンス学科生態毒性学研究室の４年生３名が参加しました。メダカの学校は、毎年夏休みに市内小学生を対象に開催されており、「メダカの飼い方教室」、「ふれあいコーナー」等のプログラムを通して、西宮の川に棲む生き物と身近に触れ合うことができる体験型イベントです。今年は保護者の方も含めて計368名の来場者があり、メダカの飼い方教室には64名の小学生が参加したそうです。

当研究室では、毎年飼い方教室を受講した小学生に持ち帰ってもらうメダカを提供すると共に、野生メダカをテーマに卒業研究を行っている学生が、本学院で保護育成されているメダカについてポスター発表を行っています。そして今年は、新たな取り組みとして、参加した学生が小学生向けの紙芝居に挑戦しました（写真参照）。これは、参加学生の中に副専攻の地域創りリーダー養成プログラムの受講者がおり、履修の成果を試してみたいということで企画しました。メダカを持ち帰る小学生に対して、「どうして持ち帰ったメダカを放流してはいけないのか？」という話題をストーリー仕立てで分かりやすく演じてくれ、西宮市職員の方からもお褒めの言葉をいただきました。このように副専攻で学んだ事が卒業研究の一環として発揮できたことは、学生だけでなく教員にとっても非常に喜ばしい出来事でした。

（環境・バイオサイエンス学科准教授　横田 弘文）

参加した小学生とその保護者に紙芝居を披露する学生

KCキャリア塾

キャリアセンターでは今年より、総合職や特定総合職（エリア総合職）を目指す学生を対象に、「KCキャリア塾」を開講した。これは、講義形式ではなくグループワーク形式を主体とし、グループで議論やワークを行うことで、就職活動で必要になる考え方や姿勢を身につける講座である。８月から９月にかけて全６回の講座を開催し、約20名が参加した。

夏期休暇中の講座では、まず自己理解とキャリアデザインについて学び、その上で「仕事」や「働くこと」について考えるグループワークを行った。後半では「企業」や「業界」の見方について学び、その一環として大阪市内でフィールドワークを実施し、社会人や企業の採用担当へのインタビューを行った。そして夏期講座の締めくくりとして、フィールドワークの成果についてグループごとにプレゼンテーションを行った。

夏期講座の成果としてはまず、就職に対して意識の高い学生同士がお互いに議論等を行う中でさらに意識を高め、次の自分の課題を認識できたことである。またフィールドワークを通じて、社会人の考え方を学ぶことができたことも挙げられる。これらは今回の講座の大きな収穫であった。

後期からも月に１回のペースで講座を開催する予定で、内容としては就職活動を目前に控えることもあり、グループディスカッション対策や面接対策、卒業生による講座等を予定している。

（キャリアセンター）

フィールドワーク後に次回のプレゼンに向けて準備する参加学生たち

<「2012ヒロシマ ピースセミナー」舞踊専攻学生による舞踊公演報告>

踊ることで伝わること 踊ることで伝えられること それは…

音楽学部 音楽学科 ３年生

私たち舞踊専攻３年生は、８月３日に広島女学院大学で行われた「2012ヒロシマ ピースセミナー」に出演させていただきました。広島原爆投下から67年になりますが、この平和を考えるセミナーで、私たちは「3.11 Requiem」を踊らせていただきました。これは私たちが、2011年３月11日に起こった東日本大震災で被災された方々に向けて９人で創った作品で、今回は鎮魂の意味と平和への思いを込めて踊りました。

この作品を創るにあたり、９人で「死とはなにか」ということを真剣に話し合いました。今回のセミナーでは外国の方々にも見ていただけたので、私たちが今できることを精一杯踊ることで伝えられたらと思いました。踊り終えた後は、温かい拍手をいただき幕を閉じることができました。

今回このような機会をいただき、「3.11 Requiem」を踊ることで観てくださった方々にはもちろん、その場にいなかった方々にも何かの形で私たちの踊りに込めた思いが伝わることを願っています。

「踊ることで伝わること 踊ることで伝えられること」

それは、人のぬくもり、思いや優しさ、心、そしてそのダンサーの思いや感情が伝わることだと思っています。そのような舞踊を、これからも私たちは、神戸女学院大学の舞踊専攻というすばらしい環境で学んでいきたいと思っています。

学生YMCA震災ボランティア報告

学生 YMCA 部長

私たち学生 YMCA は９月３日から７日までの４泊５日、宮城県石巻市で東日本大震災被災者支援ボランティアを行いました。これは「被災地に笑顔を届けよう」というテーマで、自ら企画・実行したものです。現地では東京 YMCA のスタッフによるご指導で、被災者の心のケアを重視したワークを行いました。仮設住宅では歌やダンスの披露、お年寄りとの交流、また学童保育では子どもたちと工作やゲームを楽しみました。

メディアを通して知る被災地と、実際に自分の目で見たものとは大きく異なっていました。特に仮設住宅の狭さと密集度には衝撃を受け、被災者の方々が抱えているストレスを肌で感じ、自分の無力さを痛感しました。私たちができることは何だろうかと悩み葛藤しました。

しかしその思いをメンバーと共有する中で、ある答えに導かれました。「すぐに結果は見えないし、得る必要はない。私たちの明るさと笑顔で、現に被災地の方もみんな笑顔になっていたじゃないか。最後まで笑顔で頑張ろう」。この話し合いの翌日から「私たちにも役割が与えられている」という確信を持って働くことができました。

現地スタッフの方が「自分を大切に扱ってくれる存在、経験は心に救いを与える」と教えてくださいました。相手を大切に思う気持ちは必ず伝わります。私たちの拙い奉仕を喜んでくださり、涙を流される様子を見てそのことを実感しました。一回限りで無く今後も長期的な支援を続けたいと願っています。

仮設住宅にて

第３回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

10月20日（土）、第３回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を音楽館ホールで開催し、音楽学部生27人と小学３～６年生の子どもたち39名が一緒に音楽作りに取り組みました。この催しは、東京音楽大学、昭和音楽大学との３大学連携の一環として、10月16日からの５日間、本学で「音楽作りワークショップ研修」を実施し、その最終日に学生の学びの仕上げとして組んだものです。指導役は英国ギルドホール音楽院リーダーシップ修士の３名（チェロ奏者の英国人タラ・フランクスと打楽器奏者のガーナ人イシュマエル・アフラ・サッキーが来日し、ヴァイオリン奏者でアウトリーチ要員の東 瑛子と協力）。当日はアイスブレーキング等の全体ワークの後、打楽器、歌、管楽器、弦楽器を中心とする４グループに分かれて、英語の「風の歌」を主要素材に、学生と子どもたちがアイディアを出し合って音楽作りをしました。それを互いに聴き合った後、リーダーたちの指示で様々に組み合わせて展開していきました。最後に保護者を客席に迎えて、今日の成果を披露し、アフラの指導でブギ・ダンスを会場一杯に繰り広げると、盛んな拍手が起こりました。

なお、７月７日（土）に講堂で開催した「子どものためのコンサート・シリーズ」第34回「子どものための七夕コンサート」で、シリーズ来場者２万人を達成し、２万人目の花束に加えて、記念品が舞台で10人の子どもたちに贈呈されたことを付記します。

（アウトリーチ・センター長　津上 智実）

ブギ・ダンスの練習風景（左がアフラ）

第３回絵本翻訳コンクール

多くの高校生に、課題図書の翻訳をとおして世界の多様な文化に興味を持ってもらい、「神戸女学院大学の翻訳」の認知度を向上させたいとの意図でスタートした本コンクールも今年で３年目。継続的に取り組み、応募してくださる高校も増えました。

今年度の課題図書はアイルランドで出版された“Olanna's Big Day”。国民的祭典である聖パトリック祭を舞台に、ナイジェリアから移住してきた少女と、学校のブラスバンドが力を合わせてパレードに参加する物語です。全国164校（昨年88校）から652作品（昨年282作品）と広範な応募がありました。これも高校の皆さま方のご支持があってのことと心から感謝しています。和訳のクオリティもますますあがり、審査員３名（卒業生で翻訳家・児童文学者の松岡享子氏、本学の豊倉省子非常勤講師と田辺）も選択に迷う出来栄えでした。受賞者は優秀賞が静岡雙葉高校と兵庫県立北須磨高校、佳作が福岡県立福岡中央高校、京都府立北稜高校、兵庫県立芦屋高校の各チーム。10月27日（土）に受賞者の皆さん、ご家族、そして指導教員の皆さんをお招きして表彰式が本学で行われました。式では学長から翻訳をとおして知る隣り人への思いやりについて、松岡氏から文化のはざまに立つ翻訳という行為の重さについてお話があり、最後は若さあふれる受賞者のあいさつに一同、感動を覚えつつ、思い出深い一日の幕を閉じました。

（英文学科准教授　田辺 希久子）

表彰式後、受賞者の皆さん、指導教員、そして飯学長、審査員３名でそろって記念撮影。

オープンキャンパス2012

学生募集の一環として昨年度はオープンキャンパス（以下、OC）を３回実施していましたが、公募制推薦入試説明会（２回実施）を統合し、今年度は５回に変更しました。

開催時期は2012年６月、８月、９月、12月、2013年３月に設定しています。

これまでの結果は、以下のとおりです。

６月23日（土）　高校生226名、保護者等164名　計390名

８月４日（土）　高校生511名、保護者等373名　計884名

８月５日（日）　高校生593名、保護者等406名　計999名　２日間合計1,883名

９月17日（月・祝）　高校生350名、保護者274名　計624名

OC では教職員の皆様のご協力をいただきながら、模擬講義や各種相談などのプログラムを実施しています。また、学生スタッフによるキャンパスツアーやフリートークも大変好評です。学生スタッフは皆活き活きとしており、そんな彼女たちの姿に憧れて本学に入学し、学生スタッフにエントリーしてくれる新入生も毎年多く、非常に嬉しく感じています。

現在のところ、昨年よりも多くの方に来ていただいており、神戸女学院大学の生の姿を実感していただいていると考えています。今年度もあと２回を残していますが、より多くの方に来ていただき、結果、受験に繋がるよう努力いたします。

（入学センター・広報室課長）

フリートークコーナー（夏のオープンキャンパス）

2012年度大学教授会研修会報告

神戸女学院大学では、年２回大学教授会研修会を開催している。日頃研究教育に忙しく、他の学科教員と広く議論を交わす機会が少ない本学教学専任教員が一堂に会し、本学の教学方針や教育の具体的実践等について、学科を越えて自由に意見や情報を交換し、相互に啓発しあうことを目的としている。毎回定めるテーマは大学自己評価委員会等が提案しているが、本学における教育実践がより質の高い効果につながるよう、現場での各教員の経験、認識を、社会や企業、他大学学生や卒業生、大学審議会等の方針など、教室や本学以外の観点から点検してみる機会でもある。

たとえば、今年５月１日には「本学中長期方針と教学の強化」というテーマで開催、飯学長が年度当初に公表された本学の中長期方針のもと、大学教育の現状を問う中教審の提言報告を参考に、本学の教学活動の今について検討した。第２回は10月12日に開催、「本学の教育を入口と出口の問題から考える」というテーマで、最近の入学者動向や卒業生の就職等の現況について省み、それぞれの視点から教学上配慮すべき点や新たな可能性を探った。

春と秋の休日の一日を割いて行う本学の研修会には、幸いなことに毎回ほぼ70名を越える教授会メンバーの参加を得ており、本学の教学にとっては大変心強いことである。それだけ本学の教育活動の質向上に強い関心を抱き、相互に高い信頼を感じておられる教職員に支えられているからである。

（FD センターディレクター）

秋季教授会研修会10月12日

＜留学生紹介＞

Welcome to Kobe College

2012年度には新たに４名の留学生の方々を本学に迎えました。

前期４月から７月には、韓国・徳成女子大学より２名が来学されました。

後期からは、同大学から１名と中国・広東外語外貿大学から１名の２名が来学されました。

後期からの１名は2013年１月まで総合文化学科に所属し、日本語の講義に加え、留学生を対象とした日本文化を学ぶ「Introduction to Japanese Culture」と日本の現代事情を学ぶ「Current Issues in Japan」（ともに英語で行われ、本学の学生も受講可能）、「Tutorial for Exchange Student」などを受講します。

また、後期からのもう１名は、2013年７月まで本学大学院文学研究科に所属、修士論文の完成を目指して研究します。

留学生の方々は、本学学生が留学生をサポートする“留学生バディ”制度を通じ、交流を深めています。皆様にも、留学生たちの本学での生活・勉強がより充実したものとなるよう、様々な場面でご協力いただければ幸いです。

（学生生活支援センター・国際交流センター）

留学生歓迎会にて

＜受入れ留学生報告＞

楽しさが溢れる神戸女学院で

徳成女子大学交換留学生

神戸女学院大学の皆さん、アンニョンハセヨ！私は韓国の徳成女子大学から日本へ来た、李 知倫（イ・ジユン）と申します。韓国の大学での専攻は日本語・日本文学で、神戸女学院の文学部の総合文化学科に入っています。

私は中学生の時から日本について関心を持っていました。しかし、一回も日本に行ったことがなくて、留学を準備していた時は少し不安でした。そういうわけで、日本での生活や授業を取ることに対して心配したこともありました。

2012年４月２日、ついに日本へ到着して本当の日本生活が始まりました。韓国で見たことがある神戸女学院の写真の通り、校舎はきれいでした。特に自然との一体感を持っている神戸女学院は、エコキャンパスをスローガンとして掲げている徳成女子大学に似ていて親しく感じました！

そして５月は、以前に比べると日本の生活に慣れるようになりました。韓国ではあまり乗ったことがない自転車にも乗って、日本生活がより一層楽しくなりました！また、いつもバディの皆さんや寮の学生さんからいろいろなことを手伝ってもらって、難しさのない生活をしていると思います。

授業の中には難しい点とおもしろい点、二つともあります。けれども、先生たちがいつも分かりにくいことについて親切に教えてくださいます。特に、今年から授業し始めた飯田祐子先生とのチュートリアル授業や市場淳子先生の朝鮮語文法授業でのボランティアが、記憶に残ります。

そして学生寮の先生たちと神戸女学院の職員の方もつねに留学生のことを心配してくださったり、気を遣ってくださって、心から感謝しています。皆さんのおかげで、私が無事に日本で留学生活をしていると思います。

約１ヶ月後、私は韓国に帰りますが、神戸女学院での生活と思い出はいつも大事にします。４ヶ月の間、お世話になりました！

楽しかった日々を思い出しながら…。

徳成女子大学交換留学生

「ただ、一瞬だといっても大切にしなければいけない」これは、私の大好きな本に書いてある言葉です。日本での留学生活は、すべての瞬間が楽しいことばかりで、毎日毎日が大切でした。この留学生活は、まったく後悔が残らないと言えるほどの楽しい日々でした。

特に寮で友達と一緒に過ごした思い出は一生忘れられないと思います。UNO が好きな羽場ちゃんの部屋に集まって、夜明けまでおしゃべりしながら夜更かしをしたこと、韓国料理をごちそうしたことなど、楽しい思い出をたくさんつくりました。すべてのことが寮の皆さんのおかげです。寮の皆さんには思いがけないことに遭って困った時も、いつも助けてもらいました。神戸女学院での出会いはこれからも大切にしたいと思っています。

私が日本に来て学んだのは、日本語のみならず、人と接する時は真心をつくすべきだということです。日本人の優しさや気配りを見て、今、そばにいる大切な人々をより大切にしなければならないと思うようになりました。

私はずっと自分が大人だと思っていました。しかし、実は知らないことばかりの子どもに過ぎなかったです。家族と離れて生活しながら、いろいろと試行錯誤もありましたが、前より成長した自分を見つけられました。４ヶ月は短い時間でしたが、今までの自分自身を振り返られる時間でもありました。

気がついたら、あっという間に帰国の日が近づいてきました。やっと少し慣れてきたと思いきや、もう韓国へ帰ることになりました。私は神戸女学院に留学して本当によかったと思っています。私にとっては、かけがえのない時間でした。私を成長させてくれた神戸女学院の皆さん、どうもありがとうございました。

＜派遣留学報告＞

ワイオミング大学

念願であった米国留学を経て

文学部 英文学科 4年生

2011年8月から2012年5月までの約10ヶ月の間、私は米国西部のワイオミング州にあるワイオミング大学にて、派遣留学を経験させていただきました。この約10ヶ月は、今振り返ると本当にあっという間でしたが、刺激的で充実していて、一生忘れることのない留学生活でした。

私は、本学の語学研修で豪州に1ヶ月間滞在した経験はありましたが、10ヶ月もの長期間を海外で過ごすのは初めての経験でした。念願であった米国での留学にとてもわくわくすると同時に、今まで長期間家族の元を離れたことがなかった私は、とても緊張していました。しかし多くの友人や教授に恵まれ、ホームシックなんて無関係なほど、楽しく刺激的な日々を過ごすことができました。

ワイオミング大学では、授業や寮・アパートの生活、休日の過ごし方など、全てが私に新しい視点を与えてくれ、見る世界が変わりました。米国の良さだけでなく、今まで過ごしてきた日本の良さに改めて気付きました。留学では、英語が上達しただけでなく本当に様々なことを学びました。このような貴重な経験をすることができたのも、見守ってくれ応援してくれた両親のおかげです。両親には本当に感謝しています。また、夢であった米国留学をサポートしてくださった、本学国際交流センターの方々、ワイオミング大学のスタッフの方々をはじめ、全ての方に感謝いたします。今後はこの留学経験で得たことを忘れずに過ごしていきたいです。

休暇中に友人達と行ったグランドキャニオン国立公園にて

広東外語外貿大学

私を強くした中国

文学部 総合文化学科 4年生

私の中国留学は、2011年8月から約1年間でした。高級クラスに属し、中国の歴史文化や社会生活などを扱ったテキストを使っていました。毎日3時間の授業でしたが、予習はけっこう大変でした。アジアや欧米から来ていた同級生はみんな勉強熱心で、それに影響され真剣に授業に取り組むことができました。

広東外語外貿大学は他の中国の大学とは違い日本人がとても少なく、普段から日本語を全く使わない生活だったので、中国語が自然と身に付く環境でした。中国人に日本語を教える代わりに、中国人から中国語を教えてもらうという相互学習でも語学力が高まりました。

おかげで留学期間中に新HSK（漢語水平考試）で最高レベルの6級を取得できました。1年間で自分の目標以上の成果があがったことに嬉しく思います。

学生寮のルームメートは韓国人でした。留学してすぐの頃は、日本が恋しくなることもありましたが、2人でお互い助け合いながら1年間過ごしたことで、精神的に強くなったように感じます。

日常生活のなかで、中国人のマイペースな点に驚き呆れることもしばしばありましたが、そのペースに慣れてくると、逆に中国が居心地のいい場所だと感じるようになりました。

私が帰国してから、反日デモが中国各地で起こり、日中関係がうまくいっていないようです。私にとっては複雑な気持ちですが、今後、私が中国で1年間生活した経験を活かせるチャンスがきっとあると考えています。

春学期修了式のお食事会で韓国人、スペイン人の友人と

梨花女子大学

私のルーツ 韓国での留学生活

文学部 総合文化学科 4年生

2011年8月26日から翌年7月8日までの間、派遣留学生として韓国ソウル市にある梨花女子大学に留学しました。私は在日韓国人3世であり、ルーツである韓国で一度住んでみたい気持ちが強く、留学を決意しました。

大学での勉強は毎朝午前8時から2時間半、外国人留学生と共に韓国語の授業を受け、それ以外は韓国人学生と一緒に混ざり正規の授業を受けるという一日です。韓国でトップの女子大なので、学生たちの勉学に対する意欲が強く、授業以外は自習室で勉強するというのが当たり前の光景でした。日本の学生とはかけ離れており、最初は衝撃を受けましたが、非常に刺激的でした。また世界一の総合女子大学であり大学の規模が大きく、授業のバラエティも豊富で、違った大学のスタイルを感じながら留学生活を送りました。正規の授業では全て韓国語で行われ、討論、プレゼンテーション、グループプロジェクトも多かったです。韓国人の学生だけでなく、多国籍の学生とも組む機会もあったので、メンバーの考え方の相違で一つのプロジェクトを作り上げることの大変さも知りました。

ルーツである韓国で暮らしたことは、20代という混沌の時期に自分のアイデンティティーを深く考える時間でもあり、私にとっては非常に貴重な経験であったと思います。帰国前、韓国人の友人から「どこにいてもあなたらしく」という言葉をもらいました。この言葉は私の指針のように今でも勇気を与えてくれます。

修了式の後、正門にある大学の象徴である梨の花の壁の前で

徳成女子大学

個人情報保護のため、削除しています。

＜語学研修報告＞

サセックス大学

イギリスでの１ヶ月生活

文学部 総合文化学科 ３年生

私は2012年の８月４日から９月２日までの約１ヶ月間を、イギリスのサセックス大学で実施される語学研修に参加しました。

研修の間平日はだいたい一日中大学で授業を受け、水曜日と金曜日のみ午前中で授業が終わるため午後からはサセックス大学の学生が企画してくれていた他国の留学生との交流プログラムに参加したり、バスに乗って街へ出かけてショップ店員と英会話を楽しんだり、観光ガイドブックには載っていない街へふらりと出かけてみたりととても充実した日々でした。クラスは日本人の大学生がほとんどだったので、サセックス大学の学生が企画してくれたプログラムは他国の友人を作る良い機会でした。土日は毎回ロンドンへ出かけて美術館や有名な観光地を巡ってきました。

また、授業では一人ひとりの発言が求められグループワークやディスカッションがメインでした。毎回自分たちで企画してみんなに提案する授業は日本で受けたことがなかったのでとても楽しく、充実していました。

このようにイギリスに行って、日本では得られない刺激を毎日得ることができました。初めに聞いていた情報とは違ったことが起こったため多少戸惑いましたが、異文化を学べることができてよかったと今振り返ってみるとそう思います。

最後に語学研修で支えてくださったサセックス大学の方々、神戸女学院大学の職員の方々にここで感謝の気持ちを伝えたいと思います。

オリンピック開催中だったときのタワー・ブリッジ

ヨーク大学

国境を越えて出会った仲間たち

文学部 英文学科 ３年生

私は１年生の頃、イギリスの語学研修に参加しました。前回の研修では言葉の壁に衝突し悔しい思いを経験しました。その悔しさをバネに英語を勉強し１年余り経過した今、もう一度海外で自分の成長をはかるためにヨーク大学への語学研修へ参加しました。前回はホームステイでしたが今回は寮生活のため、どんなに些細なことでも思ったことは全て英語で伝えてみようと努力し積極的に友達を作りました。先生が他国からの留学生とのディスカッションの機会をたくさん作ってくださったので、外国人と触れ合う機会も多くカナダをはじめ、台湾や中国、韓国やベネズエラ、エルサレムやロシアなどたくさんの国の人々と友達になることができました。見た目や文化、母国語や思考も全く違う人々が英語というたった一つの共通点で、たまたま出会ったカナダの地で意思疎通することにとても感動しました。みんな完璧に正しい英語など使えていませんが、伝えようという強い意志と積極性があれば一生懸命伝え合ったお互いの間に深い人間関係を築くことができるのです。このようにお互いに英語を勉強し切磋琢磨し合える他国の友達に出会えたことは本当に嬉しいです。今回の研修で以前よりはるかに英語力が伸びたことを実感し、たくさんの友達に出会えたことは前回の苦い語学研修から出発した努力の賜物だと思います。最後に貴重な学びの場を与えてくれた家族と私を支えてくださった全ての人たちに感謝しています。

カナダ博覧会でのイベントにて

西オーストラリア大学

西オーストラリア大学での１ヶ月間

人間科学部 環境･バイオサイエンス学科 ３年生

私は、2012年８月25日から９月23日までの１ヶ月間、西オーストラリア大学 CELT での語学研修に参加させていただきました。

授業はクラス別に分けられ、様々な国の生徒と一緒に授業を受けました。午前のクラスでは、文法や語彙、リスニング、リーディングを主に学び、午後からのクラスでは、オーストラリアのアボリジニ文化について学びました。

授業中、友達と意見交換をする機会も多くありました。文化や習慣が違うので様々な意見があり、とても面白かったです。また、積極的に発言し、勉強熱心なクラスメートが多く、とても良い刺激を受けました。

放課後は、友達とカフェや買い物に行ったり、メインキャンパスの図書館で宿題やテスト勉強をしていました。休日は、ホストファミリーや、クラスメートと計画を立てて、観光へ行き楽しく過ごすことができました。

この１ヶ月間、毎日たくさんの発見があり、多くの人に出会い、美しい自然に囲まれながら、とても充実した忘れられない日々を送ることができました。意思疎通がうまくできず、もどかしく感じた時もありましたが、諦めずに伝えようとすることが大切だと思いました。また、CELT で出会った友達とは今でも連絡を取り合っています。そして、またいつか再会したいです。

最後に、両親や大学職員の方々、語学研修に関わってくださった全ての方に心から感謝しています。ありがとうございました。

放課後クラスの友達と Fremantle 観光へ

フランシュ・コンテ大学

研修を終えて

文学部 総合文化学科 ３年生

この研修に参加したいと思ったのは、昨年の３月にパリへ旅行してからでした。そのときは英語で何とか過ごしましたが、今回は少しでも多くフランス語を話し、勉強も観光もさらに楽しみたいと思って挑みました。

研修先のブザンソンでは、そこで生活するための準備が本当に大変でしたが、次第に慣れ、おいしいパン屋さんを探したり、ボンボンのお店（駄菓子屋のような所）に通ったりしながら、その不便さを楽しむようになりました。はじめは先生にお願いしていた宿舎のフロントへの要求も、自力でするようになりました。自炊できたことや、宿舎のサービスにばらつきがあったことは、フランス語を使うチャンスでもあり、よかったと思います。

一番身に付いたのは、見知らぬ土地での生活力と、限られた語彙をどう使えば人に伝わるかというコミュニケーション能力です。不便なことがあっても、少しの工夫で楽しく生活できます。また、伝わるフランス語を吸収するためには、まずひとことでも何か声に出してみることが本当に大切だと感じました。旅行ではできない貴重な体験ができ、本当によかったです。国際交流センターの方々、大橋先生、両親に感謝します。研修に参加したメンバーにも大変恵まれていました。本当にありがとう。これからも勉強しもっと話せるようになって、またブザンソンのボンボン屋さんの店員さんに会いに行きたいです。こうして毎回目標を立ててチャレンジし続けたいと思います。

クラスメートと筆者

音楽学部夏期講習会報告

2012年度音楽学部夏期講習会は、７月27日～28日（舞踊）、７月30日～８月２日（音楽）の日程で、音楽館、エミリー・ブラウン記念館において実施しました。今年度は、一人でも多くの方々に参加していただきたく、完全無料化に踏みきりました所、昨年94名であった受講者が203名になり、一人でも多くの方に本学の音楽教育・環境の良さを直接感じ取っていただく良い機会になったのではと思っております。

器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエィション専攻の講習内容は、聴音、楽典のテストと授業、竹田景子（P.）、福嶋千夏（Vo.）、小幡麻紀非常勤講師（P.）によるミニコンサート、各個人レッスン及び進学相談会。受講生数162名。

舞踊専攻の講習内容はリズム・ソルフェージュ、特別講座、島﨑徹教授によるデモンストレーション「島﨑徹メソッド」、コンテンポラリー・ダンス、ショートパフォーマンス及び進学相談会。受講生数41名。

受講生の地方別、学年別の内訳は次のとおりです。

地方別		学年別	
北海道・東北	0	高校卒業以上	90
関東	2	高校３年生	55
東海・北陸	6	高校２年生	31
近畿	182	高校１年生	12
中国・四国・九州	13	中学生	9
沖縄	0	その他	6
計	203	計	203

今年は、本当に多くの中・高校生が来られ、又、無事に終了することができ、茲に感謝申し上げます。

（音楽学部事務長）

共通科目受講風景

エミリー・ブラウン記念館にて 舞踊専攻受講風景

2012年度保護者会懇談会

本学が年４回行っております保護者会懇談会は、保護者の皆さまと大学教職員が大学の教育現場や学生たちの日常生活なども含めて、理解を深め、親しくお話をさせていただく非常に大切な貴重な機会です。本年度は以下のように開催いたしました。

・６月２日（土） 本学講堂（家庭会総会後）第１学年対象、対象地域：全国、出席人数：約80名
・６月16日（土） 奈良ホテル 全学年対象、対象地域：奈良県・京都府、出席人数：42組（58名）
・７月21日（土） 博多エクセルホテル東急 全学年対象、対象地域：九州地区・山口県、出席人数：33組（46名）
・10月27日（土） 本学文学部２号館45室、エミリーブラウン記念館、第２学年対象、対象地域：全国、出席人数：55組（約67名）

学生部長挨拶に引き続き、学長による学事現状報告、キャリアセンター課長からの就職関連の説明や本学専任カウンセラーによる講演などが行われ、その後、各学科、学生生活支援センター（含：国際交流センター）、学生寮、キャリアセンターの各ブースに分かれ、個別懇談（希望者）が行われました。６月２日の保護者会は第１学年対象ということもあり教務課、キャリアセンター、カウンセリングルーム、学生生活支援センターの各担当者から、履修カリキュラム、就職関連、カウンセリング、学生生活についての説明も行われました。奈良と博多の保護者会では、皆様と昼食を共にし、なごやかな楽しい歓談の時となりました。又、今回の秋の本学での保護者会は、保護者の皆様にも楽しんでいただけましたらと大学祭当日に行われ、学生たちの活き活きとした姿も見ていただきました。

近年は時世を反映してか、就職に対する関心が高く、ご相談も多いようにお見受けしました。また、昨今、どこの教育現場においても学生の心や精神的な問題なども大きな課題となっていますが、勉学はもちろんのこと、課外活動も含め、心身共にバランスを失うことなく、いかに充実した学生生活を過ごすことができるか、学生、保護者、大学教職員が信頼、協力しあい、良い形でサポートしてゆくことの必要性を改めて感じております。

ご参加くださいました皆様に改めて感謝申し上げます。

（学生部長）

夏期インターンシップ実施報告

在学中に様々な職場での体験をすることができるインターンシップは、社会人への飛躍を準備する学生たちにとって、大変に貴重な機会となっています。本学では、キャリアセンターが多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、多くの機会を学生に提供する努力をしています。また、キャリアセンターを介さず、学生たちが自力で参加したインターシップもあります。一定の条件を満たした学生には、単位が認定されます。

この夏のインターンシップに関しては、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心よりの感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数）。

ECC（1名）、ウェスティンホテル大阪（1名）、大阪府庁（2名）、カース・キャリアセンター（1名）、西宮市役所（2名）、日本通運大阪旅行支店（1名）、日本旅行（2名）、野村證券（2名）、姫路経営者協会／姫路信用金庫（1名）、姫路経営者協会／姫路キャッスルホテル（1名）、兵庫県経営者協会／ジュンク堂書店（1名）、兵庫県経営者協会／神戸マリンホテルズ（1名）、兵庫県経営者協会／兵庫県勤労福祉協会（1名）、兵庫県経営者協会／ホテルオークラ神戸（1名）、兵庫県庁（4名）、三井住友海上火災保険（15名）、三菱UFJリサーチ＆コンサルティング（1名）、ワークアカデミー（1名）、上海中信国際旅行社（1名）、The Japan America Society of Chicago（1名）、Ten Thousand Villages（1名）、The Japan America Society of Minnesota（1名）、The Sketchy Artist（1名）。

期間は短くなる傾向があったのですが、就業体験としてのインターンシップは5日間以上の期間をもって実施されるようになっています。

学生たちのインターシップに対する関心は高く、5月に2回にわたって行われた学内のインターンシップ・ガイダンスには、あわせて600名ほどの参加がありましたし、KCCインターンシップの説明会、および参加学生による報告会には30名程度の学生が集まっていました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生たちの精力的な活動を励まし続けていきたいと考えています。

（キャリア教育委員会委員長）

KCC Internship at The Sketchy Artist

文学部 英文学科 3年生

Northfield の小さな画材屋さん、The Sketchy Artist で働いた1ヶ月間は、言葉では言い表せないほど充実していました。勤務中は、商品の整理、画材の小分け作業、段ボール箱いっぱいに届く商品に値札を貼り店頭に並べる他、Computer work や Paper work、お金の管理、オーダー用紙の記入やレジ打ちなど専門的な経理の仕事もしました。また道行く人に楽しんでもらうよう、窓を飾り付けし、店の看板も描きました。アメリカでの接客を通し、お客さんと自然にコミュニケーションを楽しめるという点に新鮮味を覚えました。日本だとお客様第一で、店員と客の間に壁を感じてしまいますが、マニュアルのない対等な立場での会話は魅力的で、カウンター越しに “Have a nice day!”- “Thanks, you too!” と言い合えることに喜びを感じました。Northfield の人々は皆気さくで、日本の文化に興味のある方も多く、異文化交流も楽しめました。

海外で働き、文化のシェアをすることで視野や興味の幅が広がりました。また現地大学の授業やダンスのレッスンへの参加など、貴重な経験もできました。そして何より心温かい人々に出会えて、本当に恵まれていたと思います。人との繋がりの大切さを改めて感じました。私を家族の一員として接してくださったユーモア溢れるホストファミリーたち、オーナーの April さん、そして常にサポートしてくださった KCC メンバーの皆様、キャリアセンターの皆様には、感謝してもしきれません。将来は世界を舞台に様々な人々と関わりながら、成長していきたいです。

いつも素敵なオーナーの April さんと

インターンシップで学んだこと

文学部 総合文化学科 3年生

9月10日～14日の5日間、㈱ECCの法人事業課と幼児教育推進課のインターンシップに参加しました。事務作業の手伝いや、お客様への営業同行を経験させていただきました。

今回、私がインターンシップに参加した目的は自分がどんな仕事がしたいのか具体的にイメージできるようにすることでした。「事務」や「営業」という言葉を知っているだけで、どうやって将来を考えたらよいのかわかりませんでした。そして実際に体験させていただいて、具体的なイメージを完成させた…まではいかなくとも、考えるヒントは想像以上に得ることができました。たとえば、自分の仕事の成果をカタチにしたいということです。私がお世話になったのは企業や学校などに講師を配置して講座を実施する部署でした。講座を実施する法人を探すことから始まり、開講の準備をします。カリキュラムの内容なども教務と相談して授業が構成されていました。仕事がカタチになることで達成感ややりがいも感じられるように思いました。たった5日間なので経験したことはほんの一部にすぎませんが、自己分析も含めて就職活動を始めるための切り口を見つけることができました。以前より社会人になることに対する考え方の視野が広がったように思います。今回経験したこと、感じたことは自分の将来を考える上でのヒントとしてこれからの就職活動に活かしていきたいです。

この度お世話になりましたECCの皆様、キャリアセンターの皆様に御礼申し上げます。

㈱ECC本社ビル外観

2012年度大学職員SD研修会

激動する社会の中で、本学が本学らしく在り続けるためには、教職員が協働し、改革・改善を推進して行くことが求められます。その基礎力を強化するために、大学では毎回内容を吟味した手作りのSD研修会を開催しています。研修への参加とともに、企画から開催にいたる全ての運営を数名の実行委員が担うこともまた研修の一環です。本年は5名の委員と大学事務長がこれに取組んでいます。

本年度は、前期の全学休講日5月2日(水)と、学生の夏期休暇中の9月13日(木)の2回にわたる一日研修会を実施しました。いずれも新築されたばかりのメアリー・アンナ・ホルブルック記念館3階に設けられた150人収容の中教室を会場とし、新教室の設備や居心地の良さを実感しながらの充実した学びの時となりました。更に2013年3月にも第3回として、半日研修会（ミニ懇話会）の開催を予定しています。ここでは既に開催した2回の研修会の内容について感謝をもってご報告いたします。

①第1回大学SD研修会
日時：5月2日(水) 9:30～15:00
場所：ホルブルック記念館3階301教室
参加者：72名
開会礼拝：大学チャプレン補
司会：広報室職員
＜午前の部＞「本学の広報を考える」
導入「大学広報について」大学事務長
発表「入学センター・広報室の広報業務について」入学センター職員
グループディスカッション・発表
＜午後の部＞「危機に備える―実践編」
グループワーク「様々な危機を想定して―緊急事象発生事例研究」
避難訓練実践

午前の発表により広報の重要性を再認識するとともに、入学センター・広報室の業務内容や方針への理解を深めました。広報室からは情報やアイデアの提供などの協力依頼がありました。9班に分かれたディスカッションでは活発に意見を交わし、広報室以外の部署でも広報マインドを持って業務にあたることの必要性を確認しました。

午後には5例の仮想緊急事象への対応を分担検討した後、全体で共有しました。また、昨年に続き避

難訓練を行いました。今回は地震発生後に階下の実験室から出火したとの設定で、雨天により避難場所を藤棚下から社交館ラウンジへ変更して、全員が素早く教室から避難する練習をしました。

②第２回大学 SD 研修会
日時：９月13日（木） 10:00～15:30
場所：ホルブルック記念館３階301教室
参加者：70名
開会礼拝：大学チャプレン
司会：人間科学部職員
＜午前の部＞
講話「本学の ICT 教育を考える」
情報処理センターディレクター
発表「情報処理センターのサポート体制」
情報処理センター職員
＜午後の部＞「危機に備える」
AED 実践体験
（指導）保健診療所職員
消火栓・AED 見学ツアー
（案内）学生生活支援センター職員
緊急危機事象事例研究

午前の講話と発表で、私たちが日々利用する本学の IT 環境がいかに整え、守られてきたか、本学の ICT 教育がいかに良質であるかについて、また、情報の安全性と利便生の関係について学びました。

午後には、全員を二分し、毎年恒例になった AED 操作と消火栓や AED 設備を確認する建物ツアーを同時に行いました。参加者全員が体験を通じて実践に備える技と知恵と勇気を養いました。

（大学事務長）

胸骨圧迫（心臓マッサージ）体験

2012年岡田山祭

大学祭実行委員会 委員長

今年の岡田山祭のテーマは「Now or Never」。

４月から１年生も入部し、総勢50名の大学祭実行委員は、このテーマを念頭に置き活動してきました。このテーマは「今やらなければ永久になし」という意味合いがあり、チャンスは一度しかないということを意識して全力で大学祭に臨みたい、そしてその一度きりの“今”を岡田山祭に参加してくれている全員が、思いっきり楽しむことができ、心に残るような大学祭を創り上げたい、という気持ちが込められております。

人数も増え、パワーアップした大学祭実行委員会で、委員長として全体を把握し、まとめていくことは想像していたよりも大変なことでした。今年はスタンプラリーや講演会といった新企画の発案もあり、例年以上の実行委員同士の話し合いや協力が必要とされました。大学祭が近づくにつれ、戸惑いや不安が大きくなっていったのですが、無事に岡田山祭を終えることができたのは、実行委員のメンバー同士が自分自身の役割を果す為に頑張り、励まし合えたこと、そして何より、顧問の先生方や職員の方々のご指導・ご協力があったからだと思っております。大学生活でこのような経験ができたことは私にとって貴重な経験であり、自身の成長にも繋がりました。私にこのような機会を与えてくださったこと、そしてすばらしい大学祭を創り上げる為に協力してくださった皆様に感謝申し上げます。

ダンスラバーズの舞台発表

大学クローバー賞表彰式

清々しい秋晴れの中、岡田山祭のオープニング（10月26日）に大学クローバー賞の表彰式が執り行われました。大学クローバー賞とは神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、顕著な活動や成績を収めた団体または個人にその栄誉を称えて贈られる賞です。選考は10月１日開催の連絡協議会において、「課外活動報告書」に基づき、連絡協議会委員10名と大学学生自治会委員８名の投票により行われました。

今年度の受賞はコーラス部、バスケットボール部、スカッシュラケット部、学生 YMCA、ダンス部、農業研究会、クラシックギター部、ラクロス部の８団体でした。中でもスカッシュラケット部は11年連続12回目、コーラス部とラクロス部は７年連続10回目の受賞となり、日々の熱心な活動が連続受賞へとつながる結果となりました。また、バスケットボール部は今回初の受賞でした。

表彰式は、橋本めぐみ会会長、井上体育部顧問、自治会副会長、自治会体育部長同席のもと、三浦学生副部長の司会で始まり、斉藤学生部長から受賞団体の発表の後、飯学長より各団体へ表彰状と賞金が授与されると、会場は受賞を称える拍手に包まれました。

今回受賞した団体も、今年度は惜しくも受賞を逃した団体も、今後の更なる活躍を期待したいと思います。

（学生生活支援センター）

表彰状を受け取るスカッシュラケット部

第11回めぐみ会賞

めぐみ会では、大学生及び中高部生徒の自主的な活動を奨励するため、神戸女学院の立学の精神にふさわしい課外活動を行っている団体を対象とした「めぐみ会賞」を設けています。本年度の受賞団体は「学生 YMCA」と「コーラス部」です。「学生 YMCA」はイエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学び、その使命を果たすべく様々な活動を企画し、参加してこられました。つまり本学の立学の精神「愛神愛隣」をモットーに活動されているといえます。「コーラス部」は大変伝統のあるクラブです。神戸女学院は、宣教師が讃美歌と楽器を導き入れて以来、音楽教育の充実を図ってきました。コーラス部の活動には先人たちにより積み重ねられてきた歴史が根本に流れていることと思います。表彰式は10月26日に大学祭オープニングの中庭ステージにて行われました。「一度きりしかないチャンス」に全力で臨むことを意識した大学祭のテーマ「Now or Never」によせて、「決断にあたった時に、チャンスを見極める力を自らの体験から身につけてください。しかし、たとえ失敗しても、求めれば必ず神様が答えてくださるはずです。」と橋本恵里子めぐみ会会長がメッセージを送りました。

なお2011年度中高部受賞団体は「広島訪問」と「秋の子ども会」でした。2012年度に関しては１月に選考・表彰いたします。「めぐみ会賞」はクラブや同好会だけではなく、社会貢献をしている小さなグループも対象になります。来年度も多くの応募をお待ちしております。

（公益社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会 副会長）

＜私の研究＞

アフリカの精神障がい者

金田　知子

私の専門は社会福祉です。なかでも特に精神障がい者福祉や国際福祉に興味を持っています。若い頃は社会福祉の制度や実践において日本より先を行く欧米の福祉に関心を寄せていましたが、７年－８年前からは、社会福祉制度そのものがほとんど存在しないようなアフリカ、特に西アフリカに目を向け、そこで暮らす精神障がい者の研究をしています。

現在取り組んでいるテーマは、「リベリアにおける薬物依存症者のリハビリテーション」です。西アフリカの小国リベリアでは、1989年から2003年にかけて大規模な紛争が展開され、一般市民が戦闘員によって虐殺されたり、少年少女たちが誘拐されて児童兵にされたりするといった深刻な人権侵害が横行しました。その背景にあったのが、戦闘員などの間で乱用された薬物（ドラッグ）だといわれています。紛争は終結しましたが、紛争を契機に拡大したドラッグ乱用の状況は、失業率の高さなどもあって、改善するどころか悪化する傾向さえみられます。

私は毎年、夏休みや春休みを利用してリベリアへ行き、ストリートで暮らすドラッグユーザーやその支援者たちにインタビューをしてきました。ドラッグユーザーたちの多くは元戦闘員で、紛争中に家族を失い、帰るところもなく、男性は、物乞い、鉄くず収集、窃盗などで生計を立て、女性のほとんどが売春をしていました。私は、研究者として、またソーシャルワーカーとして、そうした現状を分析し問題解決の糸口を見出したいと考えています。しかし、彼／彼女たちの語りに耳を傾けていると、その問題が個人レベルのものというよりも、むしろ経済や社会の構造に起因するものであり、それゆえその根深さに茫然としてしまうこともあります。それでもこの研究をまとめることが、リベリアのドラッグユーザーたちと関わってきた私に与えられた使命だと思い、悪戦苦闘しつつも歩を進めています。

（総合文化学科教授）

生きる力、信じ合えた喜びとレジリアンス

水本　誠一

精神障がいのある人々の触法行為に関連した報道を目にすることがある。多くの場合行為の内容と行為者の健康状態が記されている。やがて国民の関心は行為者がどのように処遇されるのかに集中する。その後行為者がどのように回復し社会復帰したかという関心は極めて低い。昨年精神疾患がその対策に重点的に取り組むべきとして五大疾病に指定された。精神疾患について ICD-10（国際疾病分類）では分類全体を通して「障害（disorder）」という用語が用いられている。そして用語上の問題点の中で“これは「疾患（disease）」とか「疾病（illness）」などといった用語を使用する際に生じる本質的で重大な問題を避けるためである。「障害」は決して正確な用語とはいえないが、ここでは個人的な機能上の苦痛や阻害に伴って、ほとんどの症例に臨床的に明らかに認知可能な一連の症状や行動が存在しているというときに用いられている”と定義づけている。

一人の男性から電話が入った。彼は神のお告げがあり…に来ている。しかし、ふとこれは犯罪じゃないかと思った途端怖くなり連絡したと語った。うつ病と診断されていた。現場で落ち合うことをすぐさま約束し、状況を理解できていたその機会に、落ち着くことを最優先にしつつ互いの役割について話し合った。うつ病から他の病気に移行している可能性が高く専門医による診察の必要性についてもふれた。彼は受診を受入れ入院を選択した。退院後二人ですべての被害者宅を行脚した。最初彼に代わって私が謝罪して回ったが、３日目からは彼自身が謝罪して回った。当然厳しい応対もあったが、最終的には病気を理解していただき、生活へのエールまでいただいた。人の心にふれた。自身による判断・選択に基づいて行動できたこと、自らの役割を果たしその結果受け容れられたこと。あれから数年経った今も、３ヶ月に一度“元気にやっています”と声の便りが届く。

（心理・行動科学科准教授）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ **美術部ゆっか会**

部長

美術部ゆっか会は現在、部員数26名で活動しています。油絵、水彩、アクリル画、デッサンなど、美術に関することに個人が主体となって打ち込むことができる部活です。“ゆっか”という名称は、神戸女学院に植えてあるユッカと同じくらい長く続いているということから由来しています。しかし、歴史の長い美術部ゆっか会も３年前までは休部状態にありました。復帰してからも、また１からのスタートということで苦労もありましたが、愛校バザーや岡田山祭で出展するなど積極的に活動していき、今では多くの部員が日々作品制作に励んでいます。個人での学外への出展はあるのですが、今後は部活全体での学外の展覧会への出展、入賞を目標にしていきます。

絵は個人活動で、部活でなくてもできるのではと思う人もいるかもしれません。しかし、絵を描くのが好きな人、絵を鑑賞するのが好きな人、芸術を語るのが好きな人など、美術が好きな人同士、それぞれの異なった感性を共有できるのは、刺激にも共感にもつながります。また、個人としてだけではなく、部活という団体のなかで芸術が好きな者同士が語り合ったり、意見を出したり、皆で一つのものを作り上げていく中で“美術”を通して成長することができます。芸術が好きな人は是非、美術部ゆっか会へお越しください。きっと充実した時間を過ごすことができると思います。

岡田山祭出展

［クラブ］ **K. C. Press**

部長

K. C. Press（ケーシープレス）は本学院に関する事柄を取材し、記事という形で情報を発信する新聞部です。年に５回、『K. C. Press』を発行し学内で配布しているほか、ホームページやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用した情報の配信も行っています。また、UNN関西学生報道連盟という学生報道団体に所属しており、部員は他大学の学生とともに関西圏の大学や学生の活動の取材にも積極的に取り組んでいます。

私たちは本学院や学生の「いま」を伝える活動をしています。本学院での出来事や変化、学生の取り組みについて記事にすることで、人と人とを、団体と団体とを繋ぐ架け橋のような存在となれることを願っています。

K. C. Pressの活動は発見の連続です。取材相手の方から直接お話をうかがうことで、多様な価値観に触れることができます。記事を書くために情報を集めれば、新たな知識を得ることができます。また、講演会や竣工式、スポーツの試合など、何かが起こる貴重な瞬間に立ち会えるということも活動の大きな魅力です。

『K. C. Press』は創刊より皆様に支えていただき、今年で17周年を迎えます。本学の学生ならではの視点で、本学院関係者の皆様に広く愛していただける大学新聞を目指してゆきたいと思っています。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

ミーティングを終えて

中高部報告

芸術鑑賞会

2012年度芸術鑑賞会は古典芸能の年度として、兵庫県の郷土芸能である淡路人形浄瑠璃を鑑賞しました。2012年７月５日、場所は本校講堂でした。

「人形浄瑠璃街道」と銘打ったイベントが淡路島と徳島で企画されたのが一昨年。その街道の起点としての西宮の本校で、有志による人形浄瑠璃ワークショップが結成されました。企画当初とは変更も多くありましたが、10名の生徒は淡路人形浄瑠璃青年研究会の皆さんの熱心な指導のもと、演目「戎舞」を立派に演じることができるようになり、今回の芸術鑑賞会の前座をつとめました。引き続いて「淡路人形座」の皆さんによる太夫・三味線・人形遣いの解説と「本朝廿四孝奥庭狐火の段」の公演。この３部構成により、Ｊ・Ｓ生徒及び教員は兵庫県の誇る古典芸能の鑑賞の時を持ちました。「淡路人形座」の皆さんの人形を操る息の合った動きと力強さ、講堂に響く太夫の名調子と太棹と呼ばれる三味線の音の迫力……それらに圧倒されながら、八重垣姫の優美さや狐の早変わりなど、趣向をこらした演目に、一同引き込まれ、有意義な時間を過ごすことができました。

また今回、有志の生徒たちにとっても、伝統芸能と真摯に向き合い、さらに自分たちなりの解釈や表現も加えてすばらしい演目として発表でき、よい機会となったことと思います。

（視聴覚委員会）

高等学部校内大会

2012年度の高等学部校内大会は、１学期期末試験終了後の７月４日(水)に行われました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの５種目で、全学年クラス対抗戦で試合が行われます。各クラス、思いが詰まったクラスＴシャツに着替え、どの競技も熱戦が繰り広げられました。最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る一日となりました。

ソフトボール
　１位Ｓ２Ｂ　　２位Ｓ２Ｃ　　３位Ｓ２Ａ
バレーボール
　１位Ｓ３Ｃ　　２位Ｓ３Ａ　　３位Ｓ３Ｂ
バスケットボール
　１位Ｓ２Ｂ　　２位Ｓ１Ｃ　　３位Ｓ３Ｃ
卓球
　１位Ｓ１Ｂ　　２位Ｓ１Ａ　　３位Ｓ３Ｂ
リレー
　１位Ｓ１Ｂ　　２位Ｓ１Ａ　　３位Ｓ３Ｂ

総合
　１位Ｓ１Ｂ　２位Ｓ３Ｃ　３位Ｓ３Ｂ，Ｓ２Ｂ
　ブービー賞Ｓ３Ａ

（保健体育科）

中学部校内大会

7月6日(金)中学部校内大会が行われました。開会礼拝後グランドにて、各クラスの選抜メンバーによるリレーが行われました。その後、ポートボール・卓球・ドッジボールの3種目に分かれクラス対抗で試合が行われました。この日の為に練習してきたチームもあり、クラスの応援にも力が入っており、どの種目の試合も盛り上がりました。

予定していた決勝リレーは雨天の為、グラウンドの使用ができず、残念ながら中止となりました。閉会式は第二体育館2階で行い、互いの健闘を称えあいました。1学期最後の行事にふさわしい充実した一日が過ごせました。

総合
1位　J3A　2位J3B　3位J2A
ドッジボールa
1位　J3A　2位J3D　3位J3B
ドッジボールb
1位　J3B　2位J2B　3位J2A
ポートボール
1位　J3B　2位J3A　3位J1C
卓球
1位　J3A　2位J3C　3位J2A

（J体育部係）

夏の修養会　釜ヶ崎訪問報告

高等学部　3年生

去る6月16日、私たち生徒12名は大阪西成区にある「いこい食堂」へ、炊き出しのお手伝いに参加させていただきました。狭く、蒸し暑い部屋の中でアツアツのおにぎりを握るのは大変でしたが、米加田先生をはじめとするいこい食堂の方々に指導していただき、何とか握り終えることができました。

私には忘れられない光景があります。それは、炊き出し場での、長い人の列とおにぎりを見る嬉しそうな笑顔です。炊き出しに並ぶ人は若い方からお年寄りまで様々でしたが、皆おにぎりを楽しみにするひとりの人間でした。その時に「私たちとこの人たちの間に違いはないのだ」と改めて思い知らされたのを覚えています。釜ヶ崎には炊き出しをする私たちに「グラッチェ！」と言ってくれるような優しい人たちがたくさんいました。

最後に、釜ヶ崎の労働者の方にかけていただいた言葉を紹介したいと思います。―「がんばれよ。」―この言葉は炊き出し場で、あるお年寄りが発した言葉です。その時にはこの言葉の意味が分かりませんでした。「頑張るのは私たちではなく、むしろあなた方ではないのか」、と考えたのです。しかしその謎はすぐに解けました。その後、釜ヶ崎を去る際に、また別の方が同じ言葉を私たちに投げかけたのです。「お前たちがんばれよ。俺たちみたいにならんように。」私たちは彼らの祈りを無駄にせず生きていかなければなりません。

夏の修養会　長島訪問報告

高等学部　2年生

今回私は初めて長島訪問に参加しました。参加理由は、昨年から参加している妹と、母に勧められたためで、あまり自発的な動機ではなかったのですが、本当に多くのことを学ぶことができ、良い経験になったと思います。報告礼拝で何度か話は聞いていましたが、自分にとってあまり現実味のない話であり、深く考えることはありませんでした。しかし、今回、事前学習をしたり、資料館や施設の見学に行ったり、様々な方にお話を伺っていくうちに、ハンセン病について深く知り、たくさんのハンセン病患者の方が苦しんできたことに胸が痛みました。しかし、このような悲しい事実だけでなく、患者の方々が希望を持って生きていたという側面もみることができ、私の中にあったハンセン病に対するマイナスの意識が薄れました。また、今回は元ハンセン病患者の方を訪問し、お話するという機会がありました。会う前に、どのような話をしようかと後輩たちと考えて入ったものの、失礼なことを聞いてしまわないか等、とても緊張しました。しかしそんな心配に反して、温かく迎えてくださったためほっとし、色々なお話を伺うことができました。今回私はハンセン病についてたくさんのことを学びましたが、それで終わってしまうのではなく自分も周りの人にハンセン病について正しい情報を伝えていきたいです。そして、ハンセン病だけでなく他の差別についても人々の意識が変わっていくことを願います。

夏の修養会　広島訪問報告

高等学部　2年生

8月1日から2日にかけ、18名の友人たちと共に夏の修養会広島訪問に参加させていただきました。語り部の瀬木正孝氏、広島女学院の皆様をはじめとする様々な方との出会い、また私たちの知らないところでの沢山の方々の御尽力により与えられました貴重な学びの時に、心より感謝いたします。

4度目となる広島で新たに知ったのは、原爆投下時に The Enola Gay と共に飛び立った写真撮影機が後に The Necessary Evil（必要悪号）と名付けられたという事実でした。原子爆弾が結果的に日本の無条件降伏を促し、第二次世界大戦終結の一助となったことは否定できません。しかしそれでも、原爆を必要悪などと呼ぶべきではないと思うのです。人類全体の為に、そう呼んではいけない。それは原爆を投下した行為を正当化するものではなく、或る一国を恐ろしい兵器の使用に至らしめた戦争を起こした、そしてそれを続けた全ての思想と行為を正当化するものです。「本当に恐ろしいのは原爆ではない。戦争そのものだ。」という瀬木氏の御言葉が胸に響きました。

「知らない」という選択は「知る」という責任を伴う行為に対して大変楽であるように思われます。それでも私は敢えて後者を選びたい。選ばなければならない。それこそが繰り返される歴史を止める為、私たちに与えられた唯一の術なのではないでしょうか。

「安らかに眠って下さい 過ちは 繰り返しませぬから
Let All the Souls Here Rest in Peace; For We Shall Not Repeat The Evil.」

この碑文に恥じないようにありたいと強く思います。

リーダーシップトレーニングキャンプ報告

７月16日（月）～７月18日（水）、西宮市立山東自然の家にて、リーダーシップトレーニングキャンプが行われました。参加者は、生徒50名（Ｊ２：５名、Ｊ３：10名、Ｓ１：16名、Ｓ２：19名）と教員６名でした。

リーダーシップトレーニングキャンプは、プログラムの準備から片付けまでを、生徒たちがそれぞれ役割分担をして組織します。キャンプのプログラムは、１学期中、Ｓ２生徒の幹部を中心に会議を重ねて丁寧に準備されたものです。受け身として参加するのではなく、様々な角度からプログラムに携わり、失敗や成功を重ねることで、着実により広い視野をもって行動できる力が養われていきます。

今回のキャンプでは、１日目の夕食の自炊で予定よりも時間をかけてしまうことになりました。いち早くその後の予定を検討しなおして完璧に対応しましたが、自炊の片付けは不完全となってしまいました。しかし、この失敗を誠実に受け止め、２日目以降の自炊は片付けも完璧で、時間にも余裕が生まれることになりました。生徒たちの修正力、成長力には驚かされるばかりです。

参加者の多くは、来年度入学することになる新Ｊ１のためのＪ１デイキャンプのスタッフとして、現在準備をしています。その歩みの上に神様からのますますの成長の糧が与えられますよう祈るものであります。

（ディレクター）

夏山登山

今年の夏山登山は、立山に登りました。参加者は、生徒44名（Ｊ２～Ｓ２）、教員９名の53名に現地ガイドと添乗員１名の総勢55名の大パーティーとなりました。

１日目と２日目は日本で一番標高の高い温泉地、みくりが池温泉で泊まり、立山の御鉢めぐりをしました。天気も良く頂上付近では日本初の氷河も拝むこともできました。かなりの距離を歩き、みんな足に豆ができそうなくらいでした。

３日目は奥大日岳に向かいましたが、途中の雪渓で全員アイゼンをつけ尾根に到着しました。そこからは雄大な立山を真横から巨大な壁のように見ることができ、剣岳も色々な角度からその険しさをいやと言うほどに眺めました。そして、奥大日岳でも頂上で学年ごとに写真を撮りました。

その後の下りでは、大日平の高原の遠方に赤い屋根を見つけ、３日目の宿泊地、大日平山荘を目指しました。そこからも長く感じられましたが、10年ぶりに来た神戸女学院のパーティーを、宿の方は覚えていてくださっていました。

到着後、ひとり５分のシャワータイムは、慌ただしかったですが、たくさん汗を流した後だったので、それでも十分でした。

最終日は、下山した先に落差500m という日本一の滝があり、圧倒されました。その後バスに乗り温泉地で一風呂浴びてから全員無事に西宮北口に到着し解散することができました。感謝です。

気象の変化が激しい昨今、安全なルートを選び、無事帰ることを第一に考え、伝統ある夏山登山を継続させたいものです。

（夏山登山ディレクター）

訪豪研修旅行を終えて

隔年で実施されるこのプログラムも14回目となりました。８月６日（月）から25日（土）までの20日間、生徒20名と引率２名で訪豪研修旅行に行ってきました。舩橋部長とご家族に見送られ、まずケアンズに翌朝到着しました。

ケアンズでは、オーストラリア特有の動物と触れ合い、世界遺産であるキュランダの熱帯雨林を、スカイレールや水陸両用車、高原列車など様々な角度から堪能しました。１匹見ることができたら幸せになれると言われる、オオルリアゲハを全員で目撃したのも良い思い出です。また、グリーン島に行き、海の世界遺産、グレートバリアリーフの美しい海を思う存分満喫しました。また、夜行性のロックワラビーの餌付けをしたり、満天の星空観察をして南半球特有の星座や星の位置に感動したりしました。

その後シドニーに移動し、都会でありながらも重厚な雰囲気の街並みを堪能しつつ、世界遺産のオペラハウスの内部見学ツアーに参加したり、郊外にある世界遺産のブルー・マウンテンズを訪れ、スリーシスターズと呼ばれる岩の伝説を聞いたり、ルーラというかわいい街を散策したりしました。最初の週は盛り沢山のプログラムを通して、オーストラリアの自然や文化に実際に触れ、日本との違いを目の当たりにし、充実した日々を過ごすことができました。

そして、メインイベントであるパースでのホームステイに向かいました。パースに近づくにつれ、生徒たちは徐々に緊張した面持ちになっていきました。姉妹校のMLC（メソディスト・レディース・カレッジ）の日本語の先生であるアシュビー先生と、滞在中様々なプログラムの準備をし、自らバスを運転してあちこちに連れて行ってくださったガリさんが迎えに来てくださいました。学校でホストファミリーと対面し、各家庭へ連れて帰っていただきました。最初のうちはぎこちない様子であったのが、日が経つにつれて次第に打ち解け、ホストシスターの友達とも仲良くなっていき、初日の緊張が嘘のように思えるほどでした。慣れないオーストラリアなまりに苦戦しつつも日に日に英語でのコミュニケーションに自信が芽生えたようです。有難いことに、どのご家庭でも非常に良くしていただき、いつも笑顔で接してくださいました。MLCに滞在中、今年度１学期間Ｓ１に在籍していたジョディーや、２年前に留学していたボヤンとメンとも再会することができました。MLCでは、本校生のために特別な授業が用意され、裁縫や調理、美術、体育、ESL、日本語クラスのお手伝いなどをしたり、時にはホストシスターの授業を見学させてもらったりしました。またパース郊外を訪れ、観光だけでなく、砂すべり、農場体験、ブーメラン、スパゴルフなど様々な体験ができました。たった２週間ではありましたが、誰一人大きく体調を崩すことなく、全員が意欲的にすべてのプログラムに参加できたことは嬉しいことでした。それぞれがパースを第二の故郷として、多くの思い出を作ったことは間違いありません。最終日には、涙涙のお別れとなり、口ぐちに「帰りたくない。」と言いつつ、また絶対に戻ってくると誓って、帰国の途に就きました。

始めはぎこちなかった20人が徐々に打ち解け、積極的に関わってくれたことは嬉しいことでした。日本から離れることで、自分自身のこと、日本のことなどを客観的に見ることができるのも、海外研修の醍醐味ではないでしょうか。単に「楽しかった」で終わるのではなく、これから踏み出す新たな一歩の糧となるような学び深い研修旅行となっていれば幸いです。私自身も、生徒の時に参加したプログラムに、今回は引率として再び関わることができ、光栄に思っています。今後もこの交流プログラムが両校にとって良き学びの機会となり、さらに発展することを祈っています。お世話になったすべての方々に心より感謝申し上げます。

（訪豪研修旅行引率教員）

姉妹校 MLC

中高部 教職員研修会

９月３日(月)に中高部教職員研修会が行われました。

午前９時にコムセンター１階に集合し、開会礼拝をした後に、中高部長の開会挨拶をもって研修会が始まりました。今年度は、新学習指導要領への移行期間であることも相まって、中高部の各教科の指導方針を、全教職員で共有しようということで、各教科の指導方針を発表してもらう内容が盛り込まれました。

○教科発表Ⅰ（9:15～10:30）

[教科]

[国語]
[社会]
[数学]
[理科]
[保健体育]
[音楽]

○教科発表Ⅱ（10:35～11:40）

[書道]
[美術]
[英語]
[家庭科]
[聖書]
[情報]

各教科ボリュームのある内容を５分から15分程度で発表しました。主な内容は、①何に力を入れて教科指導しているか、②各学年における進度、③新学習指導要領での変更点、④生徒の優秀作品の発表などでした。他教科の授業内容を全教員で共有し、本校の各教科の特徴をお互い確認することができました。

○「体育祭の競技に関して」（11:48～12:00）

体育祭の特定種目に危険性があるのではないか、と2012年度体育祭企画実行委員会顧問より発題され、新種目も含めて議論したいと要望が出されました。

○分科会（12:05～12:30）

発題された内容について、７～８人ずつ、Ａ～Ｆまでの６班に分かれて討議しました。

○昼食休憩（12:30～13:05）

○夏休み中の行事報告（13:15～13:50）

[リーダーシップトレーニングキャンプ]
[長島愛生園訪問]
[釜ヶ崎訪問]
[広島訪問]
[夏山登山]
[訪豪研修旅行]

○学校評価アンケートの結果報告（13:50～14:05）

前年度比でどうなったかを中心に、学校評価委員会より報告がありました。勉強面や生活面で概ね向上していることが見られました。また、向上が見られなかった点や、自由記入欄についても確認しました。

○保護者と学校の法的な対処法（14:05～14:30）

俵法律事務所弁護士の講演会に出張した教諭より報告がありました。

○探究・キャリアガイダンスの今後（14:40～15:10）

今後の探究とキャリアガイダンスのあり方について、探究・キャリアガイダンス係より提案があり、今後も意見を集めることになりました。

○分科会報告（15:10～15:22）

分科会で出た意見がＡ班から順番に報告されました。

○危機管理に関するビデオ視聴（15:22～15:35）

『自然災害から生徒を守る』を視聴しました。

2012年度の中高部教職員研修会は以上のような内容で行われ、閉会礼拝の後に、教頭の閉会挨拶をもって15時45分頃に終了しました。

教科発表をはじめ、全中高部教職員が知っておきたい内容・問題について共有することができ、大変有意義な研修会であったと思います。全体に内容が多く、分刻みのスケジュールになってしまったのが研修係としての反省点です。なお、取り上げられた発題や提案については、今後も引き続き検討していくことになっています。

（校務課 研修会係）

文化祭

今年の中高部の文化祭は、９月14日（校内用）、１５日（校外用）に催されました。

文化祭は、役員会や文化祭企画実行委員会（文企）を中心に生徒が企画から運営まで担う中高部最大の自治会行事の一つです。今年度のテーマ「Fairy Tale」の通り、中高部１号館１階の天井にはカラフルでかわいい装飾がほどこされ、アンジー・クルー記念館１階には、ジャックと豆の木をテーマにしたオブジェが飾られ、上階にまで伸びてゆく展示になっていました。

各クラスや学年、クラブなどの団体も工夫を凝らしてそれぞれの「Fairy Tale」を作り上げており、2992名の来校者の方々にも楽しんでいただけたのではないかと思います。

校内用文化祭のはじめに講堂ではバラエティーショーが開催され、夏のオーディションを突破した団体がそれぞれの賜物を発揮して、本当に楽しい、すばらしい演目を披露してくれました。

校内用、校外用の両日に開催されたクラシックコンサートでは、審査を通過した中高部の音楽家たちの演奏が披露され、まるで一般のコンサートに来ている気分にさせてくれました。

他にも舞台系クラブはこの文化祭の舞台が最高学年の引退公演となりますので、これまでの準備と練習の集大成となる作品に力を注いでいました。

コミュニケーションセンターでは学院生活をファッション・ショーの形で紹介する「女学院コレクション」を開催し、工夫を凝らしたビデオ映像と各行事の衣装などを着たモデルによって中高部の魅力が伝えられました。

また、校内用文化祭を盛り上げ、校外用文化祭でも人の流れを停滞させないための工夫として文企が企画した２つのコンテストも大成功でした。

文化祭のフィナーレを飾るエンディングは、大勢が見守る中、藤棚で開催することができました。こちらもオーディションで選ばれた団体が練習の成果を発揮して最高の盛り上がりの中で文化祭を終え、在校生は講堂で閉会礼拝を守りました。

賑やかな２日間でしたが、文化祭期間中の開会礼拝においても、閉会礼拝においても、生徒たちは普段通りに静寂の中で礼拝を守り、文企の生徒の奨励に耳を傾けて祈りました。

私はこのような生徒たちの姿に神戸女学院の伝統は生きて、受け継がれているのだと感じています。

閉会礼拝の後で文企から各賞の発表がありました。

受賞団体には「おめでとう！」という声や、責任者に対する「ありがとう！」という声がかけられ、祝福の拍手が送られました。

その後、自治会、文企、各総部、委員会からの報告と続きましたが、「おつかれー！」という声とねぎらいと感謝の拍手が送られました。これもまたよき伝統、習慣であると感じています。

中高部では「生徒主体」ということを大切にしてきましたが、こうした行事を経験しながら、生徒たちは学校生活を自分たちのものとして楽しむ術を身に着けているのだと感じています。

生徒たちは文化祭をよいものにしようと、それぞれに役割を引き受け、アイデアを出し合って、当日までの準備を重ねてきました。

その労苦のすべてが、来校してくださった皆様の笑顔や、お互いをねぎらう言葉によって、喜びに変えられたと確信しています。

在校生が毎年の文化祭を楽しみにしている背景には、「すべての労苦が報われる」という喜びを共有する経験があるように感じています。その喜びを知るからこそ、「愛神愛隣」「自由・自治」「生徒主体」という神戸女学院の精神が守られ受け継がれているのだと感じています。

最後になりましたが、この文化祭のために様々な形でご協力くださった皆様、特に、生徒たちの要望に誠実に応えてくださった施設課の皆様には心から感謝申し上げます。

〈受賞団体〉

Ｓ最優秀賞　Ｓ３	Ｓ優秀賞　Ｓ２Ｃ
Ｊ最優秀賞　Ｊ３Ｄ	Ｊ優秀賞　Ｊ３Ｃ

有志・クラブ最優秀賞　Ｓ茶道部
有志・クラブ優秀賞　Ｊ文芸部
文化・展示優秀賞　雫の会
文芸会優秀賞　Ｓ演劇研究部

（文化祭企画実行委員会顧問）

中学部キャンパス見学会

昨年度までは年度に１回、11月中旬に開催しておりましたが、今年度は初めて２回行うこととなり、第１回は９月29日(土)に開催しました。主な内容は、入試説明会、模擬授業（英語、物理、化学、音楽、体育)、クラブ活動として文化系クラブによる発表、運動系クラブによる公開練習、公開試合、他に映像による行事紹介、生徒作品展示、学院の歴史等のパネル展示などです。また、今回は日程が文化祭の２週間後でしたので、文化祭に行ったクラシックコンサートの再演に卒業生による賛助出演を加えたコンサートも行いました。新たな試みとして、自治会役員によるキャンパスツアーも行い、好評でした。もうひとつ新たな試みは、講堂での入試説明会の最後に行った生徒によるスピーチです。自治会長、クラブ活動の部長、級長などが、それらの活動を通して学んだことを発表し、在校生の実際の姿に触れていただく良い機会となりました。

第１回は９月下旬ということで予想はしていたものの、多くの小学校の行事と開催日が重なり、保護者のみで来校し、午後の入試説明会を中心に参加される方が多かったようです。来校者数は、例年の11月開催の約半数の516人でした。第２回は、11月17日(土)に開催します。

（校務課広報係）

Ｊ１秋の遠足

10月11日(水)、爽やかな秋晴れとなったこの日、Ｊ１は秋の遠足として鳴門にある「渦の道」と「大塚国際美術館」に行ってまいりました。生徒は全員出席でした。

生徒たちは遠足に臨む前にそれぞれの活動班で画家や作品を選んで調べ、ロングホームルームを使ってクラスごとに発表をしました。事前学習をして臨んだこと、ちょうどエル・グレコ展が大阪で開催されていたこともあり、関心を深めて当日を迎えることができました。

「渦の道」は満潮時にも干潮時にも合わず、ダイナミックな渦潮をみることはできませんでしたが、歩道に設置された特殊強化ガラスから見下ろす荒々しい海の様子に生徒たちは歓声を挙げていました。渦潮の見学の後は昼食会場にて礼拝を守り、昼食を共にしました。その後、大塚国際美術館に移動し、最初はクラスごとに学芸員の方についていただいて有名な作品の解説をしていただきました。４点か５点の解説を伺った後、活動班ごとに自分たちの事前学習の資料をもって美術館を巡りました。

生徒たちは事後学習として班ごとに壁新聞を作成し、遠足の報告をいたします。また、今年の10月31日はシスティーナ礼拝堂の天井画が完成して500周年の節目だそうです。おそらくテレビや雑誌で特集が組まれることと思いますが、今回の遠足での学びをいよいよ深めてゆく機会になればと願っています。

（Ｊ１Ａ担任）

Ｊ２秋の遠足

文字通り、さわやかな秋晴れの一日、奈良方面への秋の遠足が開催されました。

当日は、朝８時半に西宮北口駅すぐの芸術文化センター前を出発して、まずは、日本最古の木造建築として有名な法隆寺へと向かいました。午前10時に到着、南大門の前で記念撮影をした後、班ごとに寺内を自由に見て回りました。事前に荻先生によるレクチャーを受けていた生徒たちは、案内冊子片手に興味深そうに見学していました。

その後、奈良ホテルの近くにある「なら和み館」で奈良名物尽くしの美味しい昼食をいただき、午後からは、午前中と同じく、班ごとに奈良町周辺の自主研修を行いました。東大寺や春日大社などの世界遺産に足を伸ばした生徒も多く、それぞれが友人との親交を深めつつ、賑やかに、そして時として真剣な表情で散策していた姿が印象的でした。研修の２時間半はあっという間に過ぎ、最後にはほぼ全員が集合場所である「なら和み館」にて（随時試食をしつつ）お土産を吟味し、帰途につきました。

まだまだ楽しさの余韻に浸っていたいと思いつつも、渋滞に巻き込まれることもなく17時過ぎには西宮北口駅前に到着、解散となりました。

（Ｊ２Ａ担任）

Ｊ３秋の小旅行

10月10日（水）～12日（金）実施。

10日（水）、8:00西宮北口を出発し、昼前に加賀・ゆのくにの森に到着、各自が選んだ伝統工芸の体験学習後、皆で昼食をとりました。夕刻、辰口温泉の宿に着き、総合学習「探究」の一環として「金沢の歴史と文化」と題する講演を聞きました。

11日（木）、午前中は兼六園にてクラス写真撮影をした後、金沢の自由研修を行いました。バスで妙立寺へ行く班以外は、県立金沢商業高校ツーリズムコースの生徒に兼六園や金沢城公園を案内してもらいました。45分の間でしたがすっかり高校生と仲良くなっていました。各班で昼食をとり、午後は白川郷へ。和田家や明善寺など大きな合掌造りを見学し、のんびり過ごしました。ホテルではテーブルマナー講習を兼ねて夕食はフランス料理をいただき、その後、さるぼぼ作りを楽しみました。

12日（金）肌寒い中、高山での班別自由研修開始。古い町並を散策したり、様々な資料館を見学したりしました。飛騨高山テディベアエコビレッジへはバスを使いました。各班で昼食をとり、帰路へ。解散式は各クラスのバス内で行いました。

全員が参加でき、楽しい旅行となりました。またクラスの絆が強まり、新たな友人を発見し、これからの学校生活がより豊かなものになればと思います。

（Ｊ３Ｄ担任）

S1 一泊研修

10月10日(水)朝、定刻に西宮北口駅前を出発。生徒は全員元気に参加。一路、徳島へ。初秋の光が照り映える海面を見下ろしながら明石海峡大橋を通過。淡路島を経由して、鳴門市のホテルへ。地物の食材を活かした見事な料理の数々をビュッフェ形式で。ホテルスタッフによる阿波踊りまで堪能。ホテル出発後、香川市の屋島神社を見学。源平の古戦場に思いをはせ、いよいよ坂出市の宿舎へ。

予定より少し遅れて宿舎に到着。開会礼拝後、2回の話し合い。1回目のテーマは「神戸女学院に入って変わったこと」。皆が各人の個性を認め合うし、女子だけということもあって、本来の自分がのびのびと出せるようになった、などの意見が出ていました。2回目のテーマは「将来の夢」。S2での選択科目を決めつつあった頃だったので、話し合いにも更に熱が入ったようでした。夕食後のレクリエーションは、有志によるダンス、全員でのゲームなど盛りだくさん。最後はマイムマイムで雰囲気は最高潮に。

翌11日(木)は1回目の話し合いの内容について各班から発表した後、閉会礼拝。宿を出発後、岡山県倉敷市美観地区へ向かいました。3時間にわたって思い思いに散策を楽しむことができました。

午後5時、西宮北口駅前にほぼ予定通り帰着。研修委員さんのがんばりと皆の協力により、すべてがスムーズでした。

(S1A担任)

S2 修学旅行報告

今回は、九州地方に行く修学旅行の第1回目でした。生徒は留学生1名を含み全員参加。付添いは教員6名、看護師1名、添乗員4名でした。

10月8日朝、新大阪駅に集合。結団式の後、博多へ向かいました。博多駅で西肥バスに乗り換え、吉野ヶ里遺跡に立ち寄ってから、宿泊地平戸に到着。翌9日は、午前中平戸を自由研修し、長崎へ移動。浦上天主堂で、被爆者の方のお話を伺い、礼拝を守りました。3日目は、長崎を起点とした班別1日自由研修でした。長崎市内を巡った班、軍艦島上陸ツアーに参加した班、ハウステンボスや西海パールシーリゾートまで足を延ばしたり、外海(そとめ)のキリシタン史跡や遠藤周作文学館を訪れた班もありました。4日目は長崎から島原半島を横切って、フェリーで熊本へ渡り、阿蘇へ。阿蘇ファームランドで昼食をいただいた後、阿蘇山の火口を見学し、休暇村南阿蘇に着きました。最後の夜、夕食後にレクリエーション大会。趣向を凝らした出し物やゲームで大盛り上がりでした。最終日は、柳川で川船に乗り、御花で蒸籠(せいろ)蒸しをいただいてから、博多へ戻り、新幹線で戻って来ました。

お天気に恵まれ、一度も傘をささずに済みました。また、軍艦島や阿蘇の火口など、見るのが難しい場所も全部見学できました。生徒たちにとって思い出に残る旅行となったと思います。この旅行にあたりお世話になったすべての方々に心から感謝申し上げます。

(S2A担任)

S3　秋の遠足

10月11日（木）、京都・嵐山の遠足を行いました。

当日午前８時に阪急西宮北口駅すぐ、芸術文化センターの前にて集合し、バスで西京極まで向かいました。八つ橋庵とししゅうやかたにて、事前に各自選択した和菓子づくり体験教室（八つ橋、またはねりきり）に参加しました。どちらのコースも上手に作ることができている生徒、苦戦している生徒がおりましたが、各自完成した自作のお菓子をお土産に持ち帰ることができました。

その後嵐山・渡月橋前で集合写真撮影を行い、短時間ながら自由散策時間を経て、『渡月亭』にて懐石料理の昼食。13時半頃の解散となりました。

当日は天候にも恵まれ、良い散策日和となりました。交通事情により少々予定より慌しくなるところもありましたが、生徒たちの協力により移動、集合がスムーズに進行し、最後の解散時刻は予定通りとなったことがすばらしかったと思います。

中高６年間の最後の校外行事ということもあり、解散後も友人と嵐山の町並みを最後まで楽しむ生徒たちの姿も見かけられました。

（S３C 担任）

校内読書感想文コンクールについて

今年も夏休み中、Ｊ２とＳ２は宿題で、その他の学年は自由参加で読書感想文コンクールをおこなった。先生方から提出された優秀作を、さらに図書委員の先生方が審査して、以下のように入選者を決定した。10月19日（金）の礼拝時に、表彰式がおこなわれた。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

個人情報保護のため、一部削除しています。

秋の子ども会

今年度も、11月23日の勤労感謝の日に「秋の子ども会」が開催されました。当日は朝から雨模様でしたが、秋らしいさわやかな空気と美しい紅葉とが、子どもたちを歓迎してくれました。

神戸女学院側では、30名のグループリーダー（GL）と高等学部の新旧役員会のメンバー計20名に加えて、４名の教員が集合し、神戸真生塾の子どもたち14名の来校を今や遅しと待つこと一時間余り、朝10時前に、真生塾の先生方や神戸女学院の送り迎えスタッフに連れられた元気な子どもたちに会うことができました。

子どもたちの到着後は、開会礼拝の時を持ち、今回の実行委員長による開会宣言がなされた後、被服室にてジェスチャーゲームとクロスワードパズルを楽しみ、秋らしい素材を用いたオリジナルマグネットを制作しました。子どもたち一人一人の個性とセンスに溢れた作品の数々に、GL も感心することしきりで、あっという間に午前の時間が過ぎてゆきました。

お昼は、S役員会の新メンバー10名が、腕によりをかけたハヤシライスとポテトサラダ、そして野菜たっぷりのスープが試食室にて振るまわれました。例年にも増して工夫された豪華なメニューに、子どもたちも大喜びで平らげていました。

午後は、体育室で大縄飛びをしたりドッジボールをしたりと、思い思いに、文字通り熱気溢れる時を過ごしました。

午後２時半には再び試食室に集合し、おやつの白玉入りフルーツポンチをいただいた後、子どもたちには、S料理研究部の部員が焼いたマドレーヌがお土産として渡され、３時過ぎに閉会となりました。

今年は雨のためにグラウンドで遊ぶことはできませんでしたが、子どもたちも GL も一日中思い切り身体を動かし、頭を使い、まさに充実した一日だったのではないかと思います。今回の子ども会に関係してくださり、成功に導いてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

（S役員会顧問）

卒業生シリーズ礼拝

10月22日から26日まで、中高部では卒業生を講師としてお招きする「卒業生シリーズ」の礼拝を守りました。（23日は大雨警報が発令されたために臨時休校となりましたので11月12日に振替えて講師にはお話しいただきました）

22日：神戸女学院大学３年生で、大学で様々なプログラムに積極的に参加しておられる様子や、その経験を通して「いざという時の言葉」の大切さについてお話しいただきました。大切な言葉を心に収めておくことが自分の心を守ることになるのだという言葉は日常生活を見つめ直す機会を与えてくれました。

24日：スポーツインストラクターをされている方で、中高部在籍中には早天祈祷会に出席して「神様に用いられる自分」を見出したことや、「魂を磨くこと」の大切さを話してくださいました。「神様は私に何かをすることを期待しておられる」という言葉が心に響きました。

25日：中学部時代のテニス部での経験や受験、大学での出会いなどのお話を通して、具体的な夢はいつどこで掴むことができるか分からないけれども、結果に一喜一憂しながらそれを超えたところで、大きな力に感謝しつつ、模索しながら自分を試し続けることが大事なのではないかと力強く語ってくださいました。

26日：NHK でドラマを制作している背景には、S３の社会の授業で先生からご自身の学徒出陣の話を聞かされた時に、「先生が我々の世代に託そうとしたことを、世の中に伝えなくては」とはっきり思った経験があるように思うと話されました。

11月12日：新聞社の校閲という職に就くまでの道のりの中でよき学びの時が与えられたことや、その学びを活かすことの喜びを語っていただきました。様々な局面で柔軟に考える力を学院で培ったのだというお話がとても印象的でした。

今年度も卒業生の方々をお招きして共に礼拝を守れましたことを感謝しています。

（中高部チャプレン）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ **Ｊ書道部**

部長

こんにちは、Ｊ書道部です。

Ｊ書道部は、火・金の週２回活動しています。日々、作品展や文化祭に向けて練習に励んでいます。

部員は、Ｊ３が４人とＪ２が２名ととても少ないですが、和気あいあいとした雰囲気の中で練習でき、とても充実しています。

Ｊ書道部に入れば、書道が苦手な人でもきっと上達します。書道が得意ではなかった私ですが、今では賞をとれるようになりました。

皆様の入部をいつでもお待ちしています!!

［クラブ］ **Ｊ軽音楽部**

部長

軽音楽部はベース、キーボード、ドラム、ギターの計４パートに分かれて演奏します。バンド制ではなく曲ごとにメンバーを入れ替えています。ジャンルも洋楽、邦楽と様々です。舞台は、Ｊ１歓迎会、文化祭、キャンパス見学会、もみの木の集い、Ｊ３追い出し会と計５回あり、文化祭とキャンパス見学会は、校外のお客様も来られます。夏休みの合宿は小豆島に行きます。澄んだ空気の中で、普段とは違う心持で練習できます。軽音楽部は忙しいですが、演奏後の達成感はどんなものにもかえがたいです。

［クラブ］ **S 絵画部**

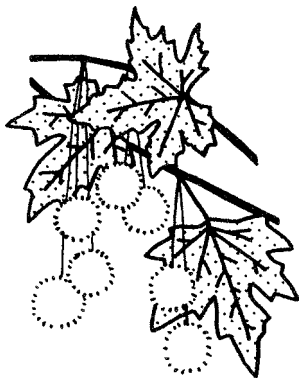
部長

私たちS絵画部は、毎週火曜日と金曜日に地下にある工芸室で活動しています。部屋は薄暗いし、絵画部って絵ばかり描いてて部員も暗い人ばかりじゃないの？と思われるかもしれませんが、その逆で、賑やかすぎるくらいです。そしてこの絵画部、結構忙しいです。1学期はバザー、2学期は文化祭、3学期は私学展、と作品を発表する機会が多く、とても充実した活動ができます。もし機会があれば、是非S絵画部にお立ち寄りください。

［クラブ］ **S 写真部**

部長

私たちS写真部は、月2回生物講義室で部員の撮ってきた写真を並べ評価し合うことで写真を学んでいます。また、そこで学んだことを合宿や長期休暇中の撮影で実践し、技術の向上を図っています。体育祭などの行事では生徒の楽しむ姿の撮影を任されており、人物写真を学ぶ機会ともさせていただいています。こうして技を磨き、文化祭では部員の写真で作ったモザイクアートやそれぞれの最も優れた写真の一つを作品として展示し、日頃の成果を見せる場としています。



〈学 院 日 誌〉

7 月25日㈬	理事会
8 月 4 日㈯・ 5 日㈰	大学オープンキャンパス
9 月 5 日㈬	中高部教員会議
9 月14日㈮(校内用)・15日㈯(校外用)	中高部文化祭
9 月19日㈬	中高部教員会議
9 月26日㈬	理事会
9 月29日㈯	キャンパス見学会第 1 回
10月 3 日㈬	中高部教員会議
10月 6 日㈯	AO 入学試験
10月 8 日㈪～12日㈮	高等学部修学旅行
10月10日㈬～12日㈮	中学部小旅行
10月17日㈬	中高部教員会議
10月19日㈮	教授会
10月24日㈬	理事会
	臨時評議員会
	臨時理事会
10月26日㈮・27日㈯	大学祭
10月31日㈬	中高部教員会議
11月 5 日㈪～ 9 日㈮	宗教強調週間
11月 9 日㈮～10日㈯	音楽学部公募制推薦入学試験
11月10日㈯	文学部・人間科学部公募制推薦入学試験、クローバー推薦入学試験
11月14日㈬	中学部教員会議
11月16日㈮	教授会
11月17日㈯	キャンパス見学会第 2 回
11月28日㈬	理事会
	中高部教員会議
12月 8 日㈯	大学オープンキャンパス
12月12日㈬	中高部教員会議
12月19日㈬	中高部教員会議
12月21日㈮	教授会
	学院クリスマス礼拝

目 次

岡田山キャンパスを記録に残す…… 1
神戸女学院家庭会報告…… 3
春季公開講座報告…… 4
学院リトリート報告…… 5
2012年度宗教強調週間…… 6
KCC だより …… 8
史料室の窓・学校アーカイヴズの役割…… 9
『潴団』の岡田美知代と『或る女』の佐々城信子―神戸女学院での出会い―…10
留学報告…… 11
Women's Education Worldwide Conference 2012報告…12
Kobe College International Students House の開設…12
人事・慶弔・栄誉・永年在職者表彰・記念賞…13
新刊一覧…… 14
オフィスの宝物…… 14
大学報告
3年目を迎える「地域から ESD を推進する女性環境リーダー」…15
シンポジウム「ジョブズの世界を訳す」…… 16
西宮市主催のイベント「メダカの学校」に参加して…16
KC キャリア塾 …… 17
「2012ヒロシマ ピースセミナー」舞踊専攻学生による舞踊公演報告…17
学生 YMCA 震災ボランティア報告 …… 18
第 3 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」…18
第 3 回絵本翻訳コンクール…… 19
オープンキャンパス2012…… 19
2012年度大学教授会研修会報告…… 20
留学生紹介…… 20
受入れ留学生報告…… 21
派遣留学報告…… 22
語学研修報告…… 24
音楽学部夏期講習会報告…… 26
2012年度保護者会懇談会…… 26
夏期インターンシップ実施報告…… 27
KCC Internship at The Sketchy Artist …… 27
インターンシップで学んだこと…… 28
2012年度大学職員 SD 研修会 …… 28
2012年岡田山祭…… 29
大学クローバー賞表彰式…… 30
第11回めぐみ会賞…… 30
私の研究…… 31
課外活動紹介…… 32
中高部報告
芸術鑑賞会…… 33
高等学部校内大会…… 33
中学部校内大会…… 34
夏の修養会　釜ヶ崎訪問報告…… 34
夏の修養会　長島訪問報告…… 35
夏の修養会　広島訪問報告…… 35
リーダーシップトレーニングキャンプ報告…36
夏山登山…… 36
訪豪研修旅行を終えて…… 37
中高部 教職員研修会…… 38
文化祭…… 39
中学部キャンパス見学会…… 40
Ｊ１秋の遠足…… 40
Ｊ２秋の遠足…… 41
Ｊ３秋の小旅行…… 41
Ｓ１一泊研修…… 42
Ｓ２修学旅行報告…… 42
Ｓ３　秋の遠足…… 43
校内読書感想文コンクールについて…… 43
秋の子ども会…… 45
卒業生シリーズ礼拝…… 45
課外活動紹介…… 46
学院日誌…… 48